

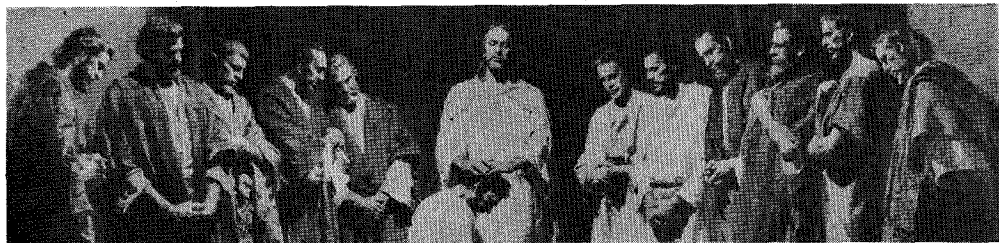
聖徒の道

1982年3月20日発行（毎月1回20日発行） 第26巻第3号  
昭和42年12月18日第3種郵便物認可



聖徒の道

3 1982



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー  
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・バックナー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ベリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト  
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード  
ローレン・C・ダン  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー  
編集副主幹：  
デビッド・ミッチェル  
子供の頁編集：  
ホニー・ソーンダース  
デザイナー：  
ロジャー・ギリング  
制作：  
ノーマン・ブライス

も く じ

常に祈りなさい	スベンサー・W・キンボール	1
質疑応答	エーメル・J・モートン	9
愛が義務感に取って代わる時	J・スベンサー・キナード	10
キリスト・イエス	エドウィン・ブラウン・ファーマージ	12
黒雲のかなたに	キャシー・ウィルコックス	20
「私はヒューズ兄弟です。 あなたのホームティーチャー です。」	マーチン・ベイツ	21
ホームティーチャーの祝福	デリス・シャン・ストウクス	23
完成を目指して	デレック・A・カスパート	25
ウィンザーお祖母さんの知恵	コリーン・ライリー	34
「私を試みなさい」	スコット・R・メイヤーズ	36
ポールマン長老のお話		38
おもちゃばこ	ロバータ・L・フェアラル/イングルマン	41
ざいさん	ベティー・ルー・メル	42
不変の原則	N・エルドン・タナー	46
ローカルニュース		52

聖徒の道 3月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30  
印刷所 株式会社 精興社  
配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19  
定 価 年間子約2,200円  
海外子約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0438 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512  
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

## 大管長会メッセージ

天の御父がすべての人にとって欲しいと願っておられることがひとつあります。それは、天父が私たちの祈りを聞いてそれに応えて下さるということです。私は祈りについて、また祈りのもたらす力と祝福について、いつも温かい気持ちを感じてきま

した。それは、言葉と模範によって、義しい心で誠心誠意祈ることについて教えて下さった天父と私の愛する両親、それに教師の皆さんのお陰です。

夜寝る前に、朝起きた時に、さらに食事のテーブルを囲んで、私たちが個人として

# 常に祈りなさい

大管長

スペンサー・W・キンボール



## 常に祈りなさい

家族として、熱心に正しい祈りを捧げるならば、愛する人々との絆が強まるだけでなく、天父との交わりを通して霊的にも成長するようになるでしょう。

私たちが特に天父の助けを必要とするのは、福音の真理を学んでそれに従って生活しようとする時であり、人生において重大な決定を下そうとする時です。重大な決定の中には、学業や結婚、就職、住居、家族の扶養、主のみ業の中での相互の奉仕、主からの赦し、そして自分がするすべての事柄について、絶えず主の導きとみ守りを求めることなどが含まれます。私たちは数多くの事柄について助けを必要としています。それらはいずれも切実で真情あふれるものです。

私はこれまでよく各地のステーク部や伝道部を訪問してまわりましたが、行く先々で、問題を抱えた人、特に大きな助けを必要としている人に会ってきました。そのような時、私が最初に尋ねるのは、「お祈りしてみましたか。何回ぐらい祈りましたか、真心から祈りましたか」ということです。私が注意して見てきたところでは、神との交わりがおろそかになる時に、罪が入り込んでくるようです。そのことがあるために、主は予言者ジョセフ・スミスにこう告げられたのです。「われ一人に対して言うことは、万人に向いて言うなり。汝らかの悪魔に征服せられて、今居る所より立ちのかされざる様常に祈るべし。」(教義と聖約93:49)

次のような言葉で祈りの方法を私たちに教えて下さったのは、ほかならぬ主御自身です。

「故に、汝らは次のごとく祈れ。『天にましますわれらの父よ。御名を崇め奉る。

御旨の天に成し遂げらるる如く地にもこれを成し遂げたまえ。

われらに対して罪を犯す者をわれらの赦す如くわれらの罪をも赦したまえ。

われらを誘惑に逢わせず悪より救い出したまえ。

主権と威勢と栄光とは永遠にこれを汝に帰し奉る。アーメン』と。」(Ⅲニ一ファイ 13:9—13)

この指針には、それぞれの心構え、主のみむねに対する愛、他の人々への愛、また、自分の信仰や生活が道に添ったものであることを明らかに示すなどといった点について、私たちが深く考えなければならない多くの事柄が含まれています。もし私たちがひとつの民として、この基本的な指針に学ぼうとするならば、祈りについて理解を深め、霊的に成長する上での備えをすることができるとでしょう。もちろん、一緒に祈る人のことや場所についても考えておかなければなりません。家族の祈りもそうなのですが、公けの場における祈りをもって祈りのすべてとすることができない理由のひとつがそこにあります。

しかし、家族が円くなって祈る時、子供たちは両親の祈りを聞きながら、天父どのように話したらよいかを学びます。私たちの祈りがいかに正直で心の込められたものであるかを知るまでに、それほど時間は必要としません。もし祈りがせわしげなものであったり、実のない形式的なものであれば、子供たちも祈りをそ

のようなものとして受け取ることでしよう。家族の祈りや個人の祈りを捧げる時は、次のモルモンの勧めに従うとよいでしょう。「それであるから、私の愛する兄弟らよ、あなたたちは……ありたけの心をつくして御父に祈れ。」(モロナイ7:48)

さて、時間や人の耳を気にせず、自分ひとりで祈る時にこそ、最もよい祈りができるという事柄も中にはあります。ひとりになって捧げる祈りはとても大切なものであり、多くの祝福をもたらします。恥ずかしさ、見せかけ、それに身に染みついた欺瞞性もすべてかなぐり捨てることができるからです。また心を開いて、包み隠すことなく正直に自分の願望や考えを話すこともできますでしょう。

私たちが集まって祈る時、それが家庭、教会あるいは社交や公けの場のいずれであれ、天の御父と言葉を交わすという祈りの目的を忘れてはなりません。これは難しいことのように思えますが、他の人々と共に祈る場合の態度としては、自分の祈りを聞く人がどのように感じるだろうかと気にするよりも、心を込めて誠実に主と言葉を交わそうとする方が望ましいと言えます。

私は昔から、個人の祈りを捧げるためにひとりになれる場所が必要であると心に感じてきました。救い主も時々その必要性をお感じになって、山や荒野の中へ入って祈りを捧げられました。同じように使徒パウロは、大いなる召しを受けた後、荒野へ入ってひとりになりました。ジョセフ・スミスはひとりになるために森の中へ入り、小鳥と木々と神だけが聞く中で祈りを捧げま

した。彼の記録には、大切な鍵が幾つか記されています。「そこで神に願うと言うこの決心に従い、これを実行しようとして私は森の中へ人を避けて入り込んだ。……このような企てをしようとしたのは、私の生涯ではじめてであった。というのは私があれほど苦しんでいる真最中でも、口に出して神に祈ろうとしたことはまだこれまでになかったからである。」(ジョセフ・スミス2:14)

私たちもできるかぎり、部屋やクローゼットなど、「人を避けて」「口に出して」神に祈れるような場所を捜すべきです。声を出して祈ることについて、主は私たちに何度も教えを与えておられます。「われ汝に再び命ず。汝心の中にも祈りまた声を出しても祈るべし。然り、人々の前にも祈りまたひそかにても祈り、公にても祈りまた陰にても祈るべし。」(教義と聖約19:28)これは私たちの祈りと信仰生活の中心をなすものであり、主は神権を持つ兄弟たちに、「各会員の家庭を訪れて、彼らが声を挙げてもひそかにても祈りを為し、すべての家庭の務めにいそしむよう勧めをな(せ)」(教義と聖約20:51)と命じておられます。

では、何について祈ればよいのでしょうか。私たちはこれまでに受けた祝福に対して、真心からの感謝と喜びを表わす必要があります。主はこのように言われました。「汝ら如何なる祝福を受くとも、『みたま』によりてこれを神に感謝せざるべからず。」(教義と聖約46:32)天父が下さる祝福に対して心からの感謝を捧げるなら、私たちの上には何とも言い表わすことのでき

## 常に祈りなさい

ない素晴らしいみたまが注がれ、安らぎを得ることができます。恵みとして与えられている福音とそれに属ける知識、両親を初め、私たちのために尽くしてくれる人々の骨折りと努力、そして、家族、友人、様々な機会、肉体、精神、生命、人生における有意義な経験、天父が下さる助け、思いやり、祈りへの答えなど、神に感謝すべき祝福はたくさんあります。

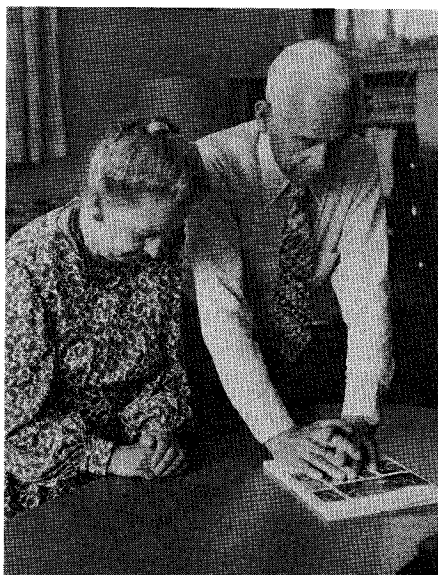
指導者のために祈ることもできます。パウロは次のように記しています。「そこで、まず第一に勧めます。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい。」(1テモテ2:1)もしこのような祈りを捧げるならば、私たちが治める国家とその法律に対する忠誠心が養われることでしょうか。そして、教会の指導者に対する信頼と愛が深まり、子供も彼らを尊敬するようになるでしょう。彼らのために祈るなら、教会の役員に対する批判が出てくることはまずないでしょう。私は生涯を通じて教会の指導者を支持し、彼らのために祈りを捧げてきましたが、これは大きな喜びです。また近年においては、聖徒の皆さんが私のために捧げて下さった祈りにより、大きな力がもたらされるのを感じています。

伝道活動全般について、私たちは常に祈る必要があります。国々が門戸を開いて福音を受け入れるように祈るのです。また、輝かしい福音のおとずれを分かち合えるように、導きと機会を求めて祈ります。子供たち一人一人が伝道の業のために日々祈る

ならば、彼らは立派な宣教師になることでしょう。

私たちは落胆した人、悩む人、病に苦しむ人、助けを必要としている人、罪を犯した人のためにも祈ります。そして私たちは、自分に敵意を持っている人のためにも祈り

人生での有意義な  
経験に対して、  
真心から感謝を捧げる。



ますが、それは次の美しくも力強い主の勧告を覚えているからです。「しかし、聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。」(ルカ 6：27-28) だれかに憎しみを感じたとしても、その人のために祈りを捧げるようにすれば、敵意は消えてなくなるでしょう。

私たちは知恵と、判断力と、理解力を求めて祈ります。また危険な状態にあってはみ守りを、誘惑の時には、それに耐える力を求めて祈ります。愛する家族や友人のことも忘れません。言葉に出して、あるいは心の奥深く静かに祈り続け、日々の営みの中でも、一つ一つのことを立派に果たせるように心の中で絶えず祈ります。心の中であれ、口に出してであれ、偽りのない祈りを捧げながら悪いことのできる人がいるでしょうか。

さらに私たちは結婚や子供のこと、あるいは隣人や仕事、決断を要すること、教会での責任、証、自分の気持ちや目標について祈ります。アミュレクの偉大な勧告に従って、神の憐れみや日々の生活の糧を求め、家族のためにまた敵の力に立ち向かうことができるように神に祈ります。すなわち、「一切の義しいことに敵対する悪魔を防ぐことができるよう……田畑の収穫が豊であるよう」神に祈るのです。そして、「声をあげて主に祈らない時でも、自分の為また自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中で」祈るのです。(アルマ 34：18-27 参照)

ところで、祈りは自分から話しかけるだ

けの一方通行のものなのでしょうか。いいえ、そうではありません。「祈りはたましいの見えぬ望み」(讚美歌176番)と言われるひとつの理由は、祈りが天父に話しかける機会であるだけでなく、天父から愛と靈感を受ける機会でもあるからです。祈りの最後には、たとえ数分間であっても、耳を澄ませて聴く時間をとる必要があります。私たちはこれまで勧告と援助を求めて祈ってきました。今度は「静まって、わたしこそ神であることを知れ」(詩篇46：10)というみ言葉に従わなければなりません。

主はどのような言葉を使われるのでしょうか。オリヴァ・カウドリが祈りの答えについて疑問に思っている時、主は予言者ジョセフ・スミスを通して次のような勧告を授けられました。

「誠にまことにわれ汝に告ぐ。汝もしこの上の証詞を得んと欲せば、これらのことの真理を悟らんとして汝が心の中にわれに向いて呼びし夜のことを深く思うべし。

われ汝にそのことに就きて心安かれと告げしにあらざや。汝、神よりの証詞より大いなる証詞をいづくに得るや。」(教義と聖約 6：22-23)

その後しばらくして、主は再び予言者ジョセフ・スミスを通してオリヴァ・カウドリに指示をお与えになりました。

「汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。

されどもし願うところ正しからずば、か

## 常に祈りなさい

かる感なくして汝の心は次第に鈍くな……らん。」(教義と聖約9:8-9)

祈りの言葉を学ぶことは、一生をかけて行なう喜びにあふれた経験です。祈りの後で耳を澄ませていると、心にある考えが湧き上がってきたり、強い気持ちを感じたりすることもあります。平安に包まれて、すべてはうまく行くと確信することもあります。しかし、私たちが正直で熱心であるならば、いつもよい気持ちを感じることでしょう。それは天父に対する温かい気持ちと、天父が私たちに対して持つておられる愛を感じるからです。私たちの中に、この穏やかで霊的な温かさの意味を知らない人がいるのは、私にとって悲しいことです。なぜなら、これは私たちの祈りを天父が聞いて下さっていることを証するものだからです。天父は私たちが自分自身を愛する以上に私たちを愛しておられます。つまり、天父を信頼し、天父のみ恵みに頼れるということの意味しています。また、私たちが絶えず祈り、ふさわしい生活をするならば、天父がそのみ手をもって導きと祝福を授けて下さるということも意味しています。

それゆえに、「みこころが……地にも行なわれますように」(マタイ6:10)と祈った後で、そのための努力をします。指導者に助言を求めておきながら、それに従わないようなことをしてはいけません。主に祝福を求めておきながら、与えられた導きを無視するようなことは許されません。そこで私たちはこう祈ります。「主よ、みこころが行なわれますように。憐れみ深き父よ、あなたは私にとって最も良いことを御存じ

です。私はあなたのいつくしみにあふれた導きを受け入れて、それに従います。」

このように祈るのは、なぜでしょうか。聖典によれば、私たちが時々「悪い求め方」(ヤコブ4:3)をしたり、必要でないことを願ったり(教義と聖約88:65参照)、「正当」でないものを請い求めたりする(IIIニーファイ18:20参照)からです。しかしそれでもなお、愛にあふれた天父は私たちの親として私たちを心にかけて下さるのです。そのことについて、主は次のように教えられました。

「あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。……

このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあるか。」(ルカ11:11, 13)

天父に祈ることは、素晴らしい特権であり喜びです。また祝福でもあります。しかし、私たちがすべきことは、祈ることだけではありません。アミュレクは誤解のないように教えています。「私の愛する同胞よ。……たとえ〔祈りを〕行っても、もしも貧しい者や着る物のない者の願いをことわり、病んでいる者、あるいは悩んでいる者を見舞わず、持物がありながらその幾分を貧しい者に施さないならば、あなたたちの祈りは空しくなってその効果はなく、またあなたたちは神の言葉を否定する偽善者になるであろう。」(アルマ34:28) 私たちは祈る時と同じように、誠実で熱心に、福



音に従った生活をするのを忘れてはなりません。

そのようにすれば、天の恵みは私たちのものになるでしょう。そして、祈りは私たちの生活に真理をもたらすことでしょう。言葉と行ないにおいて天父にまったく正直であり、しかも日々の祈りの中で悔い改めと正しい生活を営んでいるとの報告をする人は、真心から天父の助け、特に赦しを求める力を自分の中に見いだすのです。

私はイノスの物語がとても好きです。彼は助けを切望していました。私たちと同じように、主の道からそれていたのです。完全な人はひとりもいません。イノスの罪がどれほど深いものであったかはわかりませんが、彼は次のように記しています。「私は自分の罪を赦されようとして、一心不乱に神の御前に祈ったことについてあなたたちに話をしよう。」

彼の記録は心に迫るものがあり、その言葉は印象的です。「ごらん、私は獣を狩ろうと森へ行った……。」

しかし、獲物は何もありませんでした。イノスは自らの魂に語りかけ、真の自己の姿というものを懸命に求めたのです。こうしてイノスは新たに生まれ変わります。雑草のはびこった荒地で生涯を送ろうとしていた彼が、今や水でうるおった肥沃な土地を捜し求めるようになったのです。

イノスは続けてこのように記しています。「私の父が永遠の生命と聖徒の幸福について教えた言葉を度々聞いたのが私の心に深くしみこんだ。」

つまり記憶の扉が開かれて父によって刻

み込まれた言葉がよみがえり、それがイノスに警告と靈感を与えたのです。そしてこの言葉はイノスの心をかき乱しました。

「そこで私は自分の心が飢えるのを覚え……た。」悔い改めのみたまに捕らえられたイノスは良心の呵責に苦しみ、罪に汚れた過去の自分を葬って、信仰に生きる人として生まれ変わりたいと一心に願いました。

「そこで私は……私の造り主の御前にひざまずき、自分の身と霊のために一心こめて祈りかつ願った。」イノスは、人が罪のあるままに救われないことや、汚れたものは神の王国に入れないことを知っていました。そして今や、新たに生まれ変わった人には罪から清められた新たな心が与えられるにちがいないと悟ったのです。

それが取るに足らないことでも、簡単なことでもないことは、イノスは十分承知していました。だからこそ、次のように記しているのです。「私は本当に一日中神に……祈った。」

これは普段の祈りとは違います。ありふれた語句や使い古された言葉を並べたものではありません。時はどんどん過ぎ、やがて太陽も沈みました。しかし、罪の苦しみはまだ取り除かれませんでした。悔い改めは決して生易しいものではありません。また罪の赦しという賜も安閑としていて得られるものではないのです。イノスが固い信念をもって休まずに祈り続けたのは、彼にとって神との交わりが非常に大切なものだったからです。彼は「夜になってもまだ私の声が天にとどくほど大きな声で祈った。」と言っています。

## 常に祈りなさい

熱烈な祈りを捧げ、真心から約束し、その祈りが心からのものであることをはっきりと示したその後で、主のみ声がイノスに聞こえました。「イノスよ、汝の罪はすでに許されたれば汝は祝福を受くべし。」(イノス 1-5)

天父は生きておられ、私たちを愛し、悔い改める者を赦し、愛する神の子供たちに喜んで愛と助けを与えて下さいます。私たちにとって、これに勝る祝福、喜びがあるでしょうか。

私が今日に至るまでの祈りを通して知ったことは、心からの正直な祈りは愛と力と強さをもたらすということです。天父は

私たちがこの世にある間、喜んで助け、導き、教え、指導して下さいます。だからこそ、救い主は大いなる愛をもってこう言われたのです。「われ一人に対して言うことは、万人に向けて言うなり。汝ら……常に祈るべし。」(教義と聖約93:49)

この勧告に従うならば、天父が私たちの祈りを聞いてそれに応えて下さることを、身をもって知ることができるでしょう。そしてこれこそ天父が私たちすべての者に身に付けて欲しいと望んでおられる知識なのです。それを探し求めて下さい。愛する兄弟姉妹の皆さん、どうぞこの知識を探し求めて下さい。

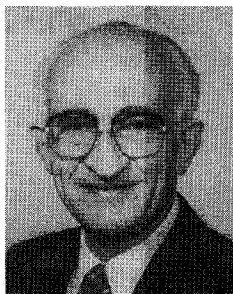


## ホームティーチャーへの提案

1. 祈りについて自分の経験を話す。また家族の経験や感じていることを話してもらおう。
2. このメッセージにある聖句や言葉の中で家族と一緒に朗読するとしたら、どれを選ぶだろうか。ほかに読んでみたいと思う聖句はないだろうか。
3. 天父が私たちの祈りを聞いてそれに応えて下さるということを自ら悟るのは、なぜそれほど大切なことなのだろうか。それによって私たちの生活はどのように変わるだろうか。
4. 個人の祈りやほかの人々と一緒にする祈りをよりよいものにするにはどうすればよいだろうか。その方法について家族と話し合う。
5. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要があるだろうか。祈りについて定員会指導者や監督から家長へあてられたメッセージがあるだろうか。

# 質 疑 応 答

●本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



## 解答者

エーメル・J・モートン

アイダホ州レックスバーグ、レックス  
バーグ・アイダホ東ステーク部祝  
福師

旧約聖書にある「目には目、  
歯には歯」(出エジプト21:  
24)という教えについてよ  
く飲み込めないところがあり  
ます。主はなぜイスラエルの子  
らに、このような報復の律法  
を与えられたのでしょうか。

興味深いことですが、この1節が  
言わんとしているのは、復讐や報  
復を正当なものとして認めるとい  
うことではありません。旧約聖書の中  
で主が言っておられるように、この  
聖句は「善には善、悪には悪」とい  
う意味の隠喩なものです。パウロが  
この概念を簡潔に述べています。  
「人は自分のまいたものを、刈り取  
ることになる。」(ガラテヤ6:7)

「目には目を」という概念は旧約聖書  
の時代にさばきづかさの指針として授け  
られたひとつの原則であり、それによ  
って公正な裁きが行なわれ、人々が個  
人的な報復をすることのないように与  
えられたものです。

アルマが息子のコリアントンに説明  
した「悪を悪に肉欲を肉欲に、……善  
を善に、義を義に」(アルマ41:13)  
という原則は回復の原則です。また救  
い主も山上の垂訓でこのように述べて  
おられます。「あなたがたの量るその  
はかりで、自分にも量り与えられる  
であろう。」(マタイ7:2)

最後の裁きの時、目は目に、歯は歯  
に、憐れみは憐れみに、親切は親切に、  
そして特に重要なことなのですが、悪  
は来世で悪しき生活に回復されるので  
す。

救い主は山上の垂訓の中で「目には目、  
歯には歯」の1節を引用されましたが、  
その後を続けてこのように言われました。  
「しかし、わたしはあなたがたに言う。悪  
人に向かうな。もし、だれかがあなた  
の右の頬を打つなら、ほかの頬をも向  
けてやりな

# 愛が義務

さい。」(マタイ5:38-39) 主はシナイでモーセに授けたもうた神聖な正義の律法を取り消されたわけではありません。それどころか、当時の律法学者やパリサイ人の教えが聖典の意味するところを誤って理解したものであることを指摘されました。律法学者やパリサイ人は、裁きはその権能を持つ人々だけに許されるものであるとは考えませんでした。「目には目、歯には歯」という原則を、他人から危害を加えられた場合は個人的に報復してもよいという考えを正当化するための根拠として解していたのです。

モーセの律法の中にあるように、イスラエルの子らに与えられていた戒めは明確なものです。「あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。」(レビ19:18) このように、彼らはあだを返すことはもちろん、人を復讐へといざなうような遺恨はいささかも心に持つことがあってはならないと教えられていました。逆に、愛し、報復を主のみ手に委ねることが、彼らの義務だったのです。

救い主は山上の垂訓の中で、復讐しようとしてはならないと民に教えられました。この教えは、かつてモーセを通して授けた同じ原則の回復に過ぎません。すなわち、本来の意味からそれたこの世的な教えに基づく言い伝えを取り除くために、この原則を再度強調されたのです。

**私**たちはこの人生において多くの事柄を義務感からします。税金を納め、遅刻しても制限速度を守り、昼食が済めば職場に戻ります。それが皆、私たちの義務だからです。また多くの人が、神の教えに従うこともそれと同様の行為であると考えています。つまり神への従順は義務なのです。ですから不従順でいる時には、神がどこかの街角に待ち伏せをしていて、ふいに襲いかかって自分を捕まえようとしているのではないかと不安で仕方がありません。私たちは自分が正しいと思うことは断固として行ないます。例えば、新聞を読みたくてしょうがない時でも聖典を読み、自分がどんなに苦しくても献金をし、確固とした決意をもってクリスチャンと呼ばれるにふさわしい生活をしているかどうか自己吟味するなどのことがそうです。

さて、当然のことですが、義務感にはそれなりの効用があります。私たちが義務感というものを重視するのはそのためです。義務感は偉大な教師であり、まどろむ人の

# 感に取って代わる時

J・スペンサー・キナード

目を覚ます鐘の音です。また、人生がちっばけな喜怒哀楽の情をはるかに超えた大きなものであることを思い出させてくれる鞭でもあります。算数の勉強をするよりも日向で遊びたがる子供たちにとってもそうであるように、私たちにも、もっと大切なことをするように人を促す義務感が必要な場合が時々あります。時々というよりは頻繁というべきなのかもしれません。

とは言え、義務感さえあれば、自分の心を変え、神のみもとに戻ることができるというような考えに惑わされてはなりません。道を照らすには、とてもそれだけでは足りないのです。朝の光が池の水を溶かすように、どこかで、愛が義務感に取って代わらなければなりません。私たちは主に従わなければなりません、それは恐れからであってはなりませんし、また、正当で当然のことだからという理由だけでも不十分です。主を愛するが故に主に従わなければならないのです。私たちは主に仕えたいと切望しています。そして、究極の理想と至高の愛

の源である主のようにになりたいと切望しています。

主が、「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである」(マタイ5:6)と言われたのは何も偶然ではありません。飢え渴くという言葉は私たちがよく知っている言葉です。この言葉は、私たち人間が必要としているものについて、何か力強いものを教えてくれます。ある作家は「我々には飢え以外の何物も存在しない」と言いました。愛という言葉は、ほかの何物をもってしても不可能な時に、人の心の中にある壁を破き、人を動かす言葉なのです。

確かに主は、私たちが義務感からした行動であっても、それを受け入れ、祝福を与えて下さることがあります。しかし、それ以上のものがあることを理解しましょう。交響曲を作曲させ、優れた小説を書かせるもの、それは愛です。親を子供の枕元に引き寄せるのも愛です。つまり、愛、愛だけが私たちが主のみもとに導くことができるのです。

# キリスト・イエス

エドウィン・ブラウン・ファーマージ

**数**年前、ある昼食会の席でひとりの有能で洞察力の深い弁護士と隣合わせた。私は彼について前からよく知っていた。私は彼が私たちとは別の教会の会員であることを知っていたし、彼の方も私が活発なモルモンであることを知っていた。

当たり障りのないことを少し話した後で、彼は真剣な顔をして幾つか質問してきた。最初の質問はこうだった。「モルモン教会はキリスト教ですか。」そして彼は、この質問は道徳的な意味ではなく神学的な意味のものであるという説明を付け加え、モルモンの教えるイエスの使命を知りたがった。

このあまりに包括的な質問に私は気を飲まれてしまった。私は考えをまとめ、系統

立てた答えをしようと思案しながら、モルモン教会で教えている救い主の使命について説明するには、何よりも先に、この世における使命以前のことから始めなければならぬことに気がついた。そこで私は、キリスト・イエスの使命として12の事柄を簡単に説明することにした。

最初に、私たちが信じている、人の存在の永遠性を説明するために、教義と聖約93章の聖句を引用した。その中でイエスは予言者ジョセフ・スミスに、人の英知の永遠性を説いておられる。「**太初**にわれ御父と共に在りき。われはその『**長子**』なり。汝らもまた太初に御父と共に在りき。……人はまた太初に神と共に在りき。英智、すなわ



# キリスト・イエス

ち真理の光とは、創造されしにあらざまた造られしにあらざ、実にかかるとべきものにあらざるなり。見よ、ここに人の自由意志あり。」(教義と聖約93:21, 23, 29, 31)

2番目に、私は天上の大会議について述べた。ここで御父のすべての子供が、人類の永遠の進歩のために定められた神の計画について学んだのである。自由意志は、人は造られたものでなく、永遠の存在であるという考えの下に生得権として与えられたものであるが、イエスはこの自由意志を守ろうとする御父の計画を擁護して立った。一方ルシフェルはこの計画を変え、人から自由意志を取り上げようとしていた。(モ一セ4:1-3参照)

3番目に私が話したのは、御父の大多数の子供たちから受け入れられた御父のこの計画を進めるために、この世と他の無数の世界を造られた、創造主としてのイエスの使命についてである。私はモーセに与えられた偉大な示現を引用した。

「われわれが力の言によりてこれらのものを創りたり。そのわが力の言葉とは、わが生みたる独子のごとくにして恩恵と真理とに満てる者なり。

われは、無数の世界を創りたり。而して、またこれらはわれ自らの目的ありて造りしなり。而して、わが子によりてこれらの世界を創りたり。わが子とは、わが生みたる独子のごとなり。」(モ一セ1:32-33)

イエスを宇宙との関連の中で考えること

は、この弁護士にはまったく初めてのこのように、彼の心に強い印象を与えた。

次に挙げたイエスの役割も、初期の教会員の間ではよく理解され、述べ伝えられていたことであるが、この弁護士には聞き慣れないことのようにだった。私は、イエスが旧約の神エホバであり、アブラハム、イサク、ヤコブの神であり、モーセの律法をお与えになった御方であることを説明した。イエスはこのことを、カートランド神殿の中で予言者ジョセフ・スミスに語られた。(教義と聖約110:1-4参照)また、はるか以前に、イエスはニーファイ人にも御自身の使命について告げておられる。

「律法を授けたる者、またわが民なるイスラエル人と誓約を結びたる者はすなわちわれなり。それ故に、モーセの律法はわれによりてその目的を達して効用のなきものとなりたり。われは律法の目的を達するために来りたるによりて律法は終るなり。」

(IIIニーファイ15:5)

旧約聖書の神エホバこそ、肉体を得てこの世に生誕する以前のイエスであるという教えも、背教者の教えに取って代わられるまでの400年あまりの間、古代の教会で述べ伝えられていたことであった。古代のユダヤ人キリスト教徒たちが、モーセの律法や予言者の権威を汚したとして告発された時、常に断言してきたことは、この教えは決して新しいものではなく、はるか昔から説かれてきたものであり、時の初めからイエス



## キリスト・イエス

肉体を離れた霊が住む黄泉すなわち霊界におけるイエス・キリストの使命をできる限り説明した。そして、この使命についても古代の教会員たちはよく知っていたと再度強調した。これは真実であり、御父の計画の中できわめて大切なものであった。

イエスは御自分がなさろうとしておられることを変貌と呼ばれる出来事の直前にピリポ・カイザリヤの地で使徒たちに明かされた。予言者ジョセフ・スミスは、イエスが変貌された時にペテロ、ヤコブ、ヨハネは大切な鍵とエンダウメントを受けたと述べている。そしてこのことは、結び固めの権能について主が先にペテロに言われた言葉を一層意味深いものとするのである。(History of the Church「教会歴史」3:387参照) 主の「人々は人の子をだれと言っているか」という問いに対するペテロの、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」という堂々たる宣言を聞いた後、救い主はペテロに次のように言われたのである。「黄泉の門もそれに打ち勝つことはない。」(マタイ16:13-19、欽定訳より和訳) 欽定訳の新訳の部分を手がけた学者たちと、現代の一部の人たちとでは、“Hell”という言葉の意味のとらえ方が違っている。それは邪悪な人が行く所、あるいはサタンの領土を指しているのではない。死者の住居、すべての死者の霊が行く所を意味するギリシャ語のハデスと同義なのである。(訳注: 欽定訳の“Hell”に当たる語は、日本聖書協



主は使徒を聖任された。

会発行の口語訳新約聖書では「地獄」または「黄泉」となっているが、「黄泉」はギリシャ語のハデス、「地獄」は同じくゲヘナを訳出したものである) また、町の「門」とはこの市の外壁であり、中にいる者と外部



御自身が予言者たちに語られてきたということである。「エウセビオスの教会史」(*The Church History of Eusebius*)の編者、アーサー・カッシュマン・マギファート(合衆国の神学者、1861—1933)は、その書の中で、偉大なこの最初の教会史家エウセビオスが古代のすべての教父たちと同じように、イエスこそ旧約聖書の中で聖なる姿で予言者たちに現われた御方にほかならないと考えていた事実を、次のように指摘している。

「エウセビオス(パレスチナの神学者、教会史家、学者、260?—340?)は、古代の教会で一般的に教えられていた、旧約聖書の中に現われた神は三位一体の第二位の御方キリストであるという考え方を受け入れている。アウグスティヌス(古代のキリスト教会の教父、哲学者、354—430)は、キリスト顕現説を、父と子が同一本質の関係にあるという教義に矛盾するものであると主張し、これと異なる見解をとった最初の教父であったと思われる。」(マギファート「エウセビオスの教会史」*The Church History of Eusebius* 1890)

モルモンが説くキリストの使命について話し合う中で、彼と私の認識が一致していたのは、第5番目の使命についてだった。イエスが予言の言葉通り処女マリヤから生まれ、当時の人々に福音を教え、十字架につけられたという点において、ふたりが信じていることは同じであった。(もっとも主はそれより以前の予言者たちに教えてお

かれたみ言葉通りに、御自身の民にもう一度福音を説かれていたのである)それから私は、イエスは地上におられる間、神権の権能によって御自身の教会を設立されたというモルモンの教えを説明した。一部の人人は、この教会を、イエスが十字架におかかりになった後に弟子たちによって作られたものと考えているが、そうではない。主は十字架におかかりになる以前に、使徒たちを聖任され、七十人たちを伝道に遣わし、組織作りをされたのである。

言うまでもなく、主の第一の使命は、他のいかなる人といえども代わることのできないものであった。すなわち、世の人の罪を贖うために十字架におかかりになるというキリストとしての使命である。これ以上確かな方法はないと信じていると、私は若い弁護士に証した。ただ私はどのようにして人の罪を我が身に負い、それによって全人類に復活をもたらすことができるのか、すべてを理解しているわけではないと言いつつ添えた。私は確かにそれが真実であり、救いの計画のこの部分は、人の意志にかかわりなく行なわれるもので、人に理解されるかどうかによって実効性が左右されることはまったくないと心から確信していた。

イエスの6番目の使命として私が挙げたことは、この弁護士にはまったく初耳のようだった。確かにそれは特異な教えであり、彼の考えや認識からすれば受け入れ難いものであったろうと思う。私は、死によって



の者とを隔てているものである。つまり、主がその時弟子たちに言われたことは、門すなわち死者の住む霊界の壁といえども、教会がその中に入り込み、死の縄目を受けている人々を解き放つのを妨げることはできないということである。実際に主は、自ら霊界に降りて行き、そこで福音を伝えて、人類を長い間縛りつけてきた死の力に打ち勝たれたことを宣言されたのである。

私は、このような信仰が初期の教会の人間の間にあったこと、また、予言者ジョセフ・スミスを通してこれが完全な知識として回復されたことを断言した。教義と聖約の神権に関する章の中で、主はジョセフ・スミスに、人に救いをもたらすためのひとつの計画を明らかにしておられる。その計画とは「ただにイエス・キリストが『時の絶頂』にこの世に肉身を受けて来りたまひし後に彼を信じたる者のみならず、またすべて始めより在りし者も、すなわちいまだキリスト来りたまわざる以前に在り、すべてのことに於て彼をキリストなりと真に証をなしたる聖霊の賜により靈感を受けて語りたる聖き予言者たちの言を信じたる者も永遠の生命を得」(教義と聖約 20: 26) ことができるようにするためのものである。

これと同じ内容を、2世紀のキリスト教学者イレナエウスが、驚くほどにジョセフ・スミスの言葉と似た表現で教えている。

「キリストがおいでになったのは、ティベリウス(キリストの時代のローマ皇帝)

の時代にキリストを信じていた者だけのためではない。また御父は今生きている者のためだけでなく、世の初めから、隣人に正義と敬愛をもって接し、キリストにまみえ、そのみ声を聞きたいと心から願い求めてその時代を生きたすべての人のために、みこころを行なわれるのである。」(“Against Heresies” 『異端反駁論』 1: 454—55)

私は、福音が霊界にも伝えられたことは、救いの機会は今人類に与えられるというこの教義と密接な関連性を持っていると説明した。

アレクサンドリアのクレメンス(2世紀の神学者)はこう述べている。

「そのために、主は黄泉にいる人々にも福音を宣べ伝えられた。そして聖文はこう述べている。『黄泉が減びに言う。われわれは主の姿かたちは見なかったが、主のみ声は聞いた。』……一体どのようにして聞いたのだろうか。聖文には、洪水で罰せられた人人に主が福音を宣べ伝えられたとは記されていない。……主の僕である使徒たちが、黄泉にいる人々に福音を伝えたのである。それはこの世においてもそうであったが、あの世においても、主の僕の内最も優れた者たちが主の代わりに働くことがどうしても必要とされたからであろう。そのために主がヘブル人たちを悔い改めさせ、そのヘブル人たちが異邦人を導かなければならなかったのである。……主が黄泉へ下って行かれたのはほかでもない、福音を伝えるた

## キリスト・イエス

めである。……なぜなら、霊界にいる者たちを裁判もなしに罪ありとすることは正しいことではない。また、〔救い主の〕誕生後に生きた人だけが、神の正義の恵みに浴するとしたら、それも正しいことではないからである。……主が、不当な責めを受けることがないようにと、生きている人々に福音を説かれたのであれば、それと同じ理由で、御自身の降誕以前にこの世を去った人々にも福音を伝えられたと考えて何の差し支えがあるだろうか。〕(“The Miscellanies” pp. 328—34)

これと同じ内容のことが、啓示によって近代の予言者ジョセフ・F・スミスに知らされた。それはジョセフ・F・スミスが、獄獄にいる霊にキリストが福音を説かれたというペテロの記述の意味を、深く考えていた時のことだった。(「死者の贖いに関する示現」参照)

キリストが霊界に下られ、エホバとしてその使命を果たしていた時からの弟子や予言者たちの中から宣教師団を組織されたことは、初期の教父たちの多くが、しばしば強調していたところである。

私は弁護士に、この主の働きに関連するものとして、死者のためのバプテスマ、すなわち身代わりのバプテスマの儀式があることを説明し、これについてはパウロがコリントの聖徒たちに、肉体の復活が確かに起こることの証拠として述べていることを付け加えた。「もし死者が全くよみがえらな

いとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。)(Iコリント15:29)身代わりのバプテスマはローマ帝国時代でも、大きな都市にはびこる様々な哲学に汚染されることが比較的少なかった4世紀に入ってもかなりの間続けられ、それ以後もさらに伝えられていったようである。

7番目の使命については、ふたりとも同じ考えで、話が合った。私たちは復活について、また復活されたイエスがマリヤやペテロや他の弟子たち、エマオへ向かうふたりの弟子、テベリヤの海で漁をしていたペテロと弟子たちにみ姿を現わされ、ついには昇天されたことについて話し合った。私は主がこの時期に使徒たちにさらに多くの教えを与えられたことを指摘した。それらの教えの内容がどのようなものであったかはともかく、主は復活の真实性について、私たちすべての者に議論の余地のない教えを残されたのである。(主御自身が弟子たちに姿を現わされたことがそれである。「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ。」ルカ24:39)そして主はまた戻って来るという約束をされた。昇天の時にこう言い残しておられる。「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでにな



るであろう。」(使徒1:11)

彼は8番目の使命については何も知らなかった。私は、主が西半球でも導きと教えを施されたことを説明した。それは主がユダヤ人に言われた次の言葉の成就であった。「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」(ヨハネ10:16) 私は弁護士に、御父はこのアメリカ大陸の人々にも御子を紹介されたことを話した。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」(IIIニーファイ11:7) それから私は、イエスが東半球で築かれたと同じ教会をどのように組織されたかを説明した。十二使徒が召され、聖任された。また、偉大な奇跡が行なわれ、盲人の目が見えるようになり、足なえが歩けるようになった。子供たちは、東半球の子供たちとは比べものにならない驚くべき奇跡を体験した。イエスがこの時語られたイスラエルの家の状態と働きに関する教えに匹敵するものは、他のどの聖句にも見られない。そのほか、聖餐の儀式が定められ、聖霊が授けられた。こうして3日にわたって導きと恵みを施された後、イエスは天に昇られた。

私は9番目の使命を挙げたが、この使命について私たちは、それが実際に行なわれたということ以外、何も知らない。イエス

はニーファイ人への話の中で、ほかにもまだ自分の声を聞くはずの羊がいると述べられた。(IIIニーファイ16:1-5)つまり、今は、記録はないが、主の導きと教えを受けた民が確かにほかにもいたのである。

10番目の使命は、予言者ジョセフ・スミスを通して回復の業を導くことであった。私は、自分の証を添えて、ジョセフ・スミスが真の教会へ導いて下さるよう、どのように神に願い求めたかを話した。また、最初の示現についても説明した。御父と御子がジョセフにみ姿を現わされ、その後、天使がジョセフ・スミスに現われて、時の絶頂に主御自身がお建てになったと同じイエス・キリストの教会を地上に再び設立するために、必要な福音の知識と神権の権能をジョセフ・スミスに与えたもうたのである。

11番目に挙げられるのは、救い主が様々な人々にみ姿を現わされたことである。最初の示現でジョセフ・スミスを訪れた後、ロレンゾ・スノーをはじめ何人かの予言者に現われている。そして私は弁護士に、過去の時代と同様、今日も確かに主が主の教会を導いておられることを述べた。

最後に、私は御父の偉大な計画における最終的な、しかもまだ成就されていないイエス・キリストの使命について述べた。モルモンは、文字通り主の再臨があり、御父の指示によって主が創造されたこの地球を治められることを信じているのである。

# 黒雲の かなたに

キャシー・ウイルコックス

**教**会幹部からウィスコンシン州のマディソンで地域大会が開かれることが発表になった時、私たち家族は、たとえ 240 キロの道のりを行く旅費がなくても大会に出席するつもりでいました。果たせるかなそれから 2 週間後、主人の雇い主から、だれかマディソンまでトラックを運転して行ってもらえないかという話があったのです。この臨時収入があったお陰で旅費を賄うことができましたのでした。

ところで私は近くの食料品店に行く時でも、よく道に迷ってしまいます。しかし夫から、子供たちと私は夫の運転するトラックの後について来ればよいと言われて、私は万事うまくいくと思いました。

マディソンまでの旅は、何事もなく無事でした。そして大会は私たちと救い主、またお互いの絆を深める素晴らしい祝福となりました。

マディソンからの帰路、私たちは激しい雷雨に出くわし、視界が悪かったために 10 分程トラックの姿を見失ってしまいました。そこで私は車を止めて、子供たちと一緒に、

どの方向に行けばよいのか教えて下さいと天父に願い求めました。5 分もたたないうちに、私たちの車は再び夫の車のすぐ後ろを走っていました。しかし激しい雷雨は一向に衰えず、一寸先も見えない豪雨の中で、またもやトラックの姿を見失ってしまいました。私たちはもう一度祈るために、比較的車の少なそうな脇道に出ました。不案内な土地で、右も左もさっぱりわかりませんでした。雷雨はますますひどくなってきます。私は地図もなく、数時間かかる我が家までをどうして帰ったらよいのか見当もつきませんでした。それでも気持ちは落ち着いていて、何かがそのまま進むようにと告げるのを心に感じていました。

それから 30 分もすると、空は一面墨を流したようになり、滝のような雨が車に叩きつけてきました。子供たちは、私が何度大丈夫よと言いついても不安な様子です。私は今度家が見えたらそこで車を止めて、道が間違っていないかどうか聞いてみると約束しました。しかし行く手にトルネード（たつまき）の警報が出ているので、これ以上この道を先に進むのはやめた方がよいと人々から言われた時だけは、子供たちもさすがに青い顔をしました。

子供たちがめそめそする中で、ともかく私たちは祈りました。素晴らしかった 2 日間の大会と、その間家族が一緒にいられたことを主に感謝し、また神権に対する感謝の気持ちを述べました。そして子供たちが気持ちを落ち着け、天父の愛とみ守りを感じることができるようにと願いました。

そして私たちはそれまで進んで来た道をさらに走り続けました。途中、私はみんな

で歌を歌うことに決めました。最初は陽気な楽しい歌やフォークソングから始め、最後は讃美歌になりました。讃美歌を歌い始めてから間もなく、快い平安が車の中に広がり、子供たちは一人一人静かに眠りにつきました。

私はそれまでに見たこともないひどい嵐の方に向かって車を走らせながら、ずっと歌い続けましたが、その時の安らかな気持ちは素晴らしいものでした。私は、そのままずっと行くようにというみたまのささやきを感じました。車の中がとても静かで、聞こえてくるのは自分の心臓の鼓動と子供たちの安らかな寝息だけでした。このような静けさを私は感じたことはありません。その時です。にわかにあたりが暗くなって、猛烈な風雨が車を襲ったのです。一瞬私は息を飲みました。が、それからすぐ私は心の中に、天の聖歌隊が声高らかに繰り返しこの歌を歌うのを耳にしたのです。

黒雲迫りきて  
平和を乱すとき  
明るき希望あり  
救い近きを知る

(讃美歌170番)

私はあまりの平安にもう少しで圧倒されてしまいそうな思いでしたが、すぐにまた自分が天から直接啓示を受けたことを悟りました。

こうして私と子供たちは無事家に帰ることができました。トルネードは何もかも破壊しながら進んで行きました。しかし後でニュースでわかったことですが、夫の車はわずか2、3分の差でトルネードの前方を走っていました。また私の車も、もし別の

道に行くようにというみたまの導きがなかったなら、危うくトルネードの真ただ中に飲み込まれているところでした。天父はその子供たちを御存じであり、愛しておられます。またどの道がどこに通ずるかを余す所なく、つぶさに見ておられ、私たちがその教えを心に留めさえるなら、安全に目的地まで導いて下さるのです。私は、そのことを知識として得られたことに感謝しています。

「私は  
ヒューズ兄弟です。  
あなたの  
ホームティーチャーです。」

マーチン・ベイツ

**私**が最後に妹のロレインを見たのは、甘いせっけんの香りが漂う防音設備を施した病院の一室でした。彼女は金属ベッドの殺菌された白いシーツの上に横たわり、タンクやチューブや酸素吸入装置に囲まれていました。

「ママ。」妹は静かな優しい声で言いました。「ママ、私、死ぬのね。」それは、医師にも否定できないことでした。妹は私たちにも否定できないと頼みました。——どうやって祈るのかさえ忘れていた私たちでした。死ぬ前の晩に、私は父と母が少し休んで

いる間、妹のそばに座っていました。

妹は昏睡<sup>こんすい</sup>状態でした。私は、自分の思いが伝わって妹が快方に向かってくれることを願いながら、酸素補給テントの下からその小さな手を握りしめました。たったひとりの妹なのに何と遠く離れていたことでしょう。そのことを思うと胸が痛みました。家を出て大学、仕事と独り暮らしを続けてきたこの10年間、妹のことはあまり考えたことがありませんでした。

それからしばらくして、だれかが薄暗い病室に入って来る気配がしました。振り返ると、少し頭の毛が薄くなりかかった男性で、優しい目をしてほほえんでいました。

「こんにちは。」彼は物静かな声で言いました。「私はヒューズ兄弟です。あなたのホームティーチャーです。やっと見つけたよ。」

「兄弟？」私は心の中で驚いていました。「ああ……モルモンの人。」

いつも地味なスーツに身を包んでやって来るこのホームティーチャーはとても良い人たちで、少しの時間話をすると、礼儀正しく別れの挨拶をして帰って行くのでした。それとも彼らは宣教師だったのでしょうか。私たちは不活発で、実際のところ、この町に住んでいた2年間というものは教会との接触を避けていたのです。私は彼がどうやって私たちを見つけたのだらうと不思議に思いました。

「容態はどうですか。」彼は優しくほほえみながら尋ねました。それは決して場違いでない、思いやりにあふれたほほえみでした。ひとりよがりのおせっかいではありません。とにかく、彼が本当に心配してくれ

ていると感じることができたのです。

どういうわけか、私は最初に、医者からも絶望的と宣告されるほどの病状に妹を追い込んだ、いろいろな併発症について、事細かく、口を窮めて彼に説明しようとした。しかし実際は、うめき声ともつかない声が口をつき、せきを切ったように、涙があふれてきたのです。

私は、その夜のヒューズ兄弟の言葉は何も覚えていません。ただ、彼が帰った時、私が心に思ったのはロレインがどこかで生き続けるだろうということでした。金色の薄い髪をした、このいたいけな小さな体は、ひと時の間彼女を覆っていた幕屋に過ぎないのです。彼の口から聞いたわけではないのですが、私は心の片隅で、妹がだれか慈愛に満ちた人のところへ、両腕を挙げながら駆けて行く姿を思い浮かべることができました。まるで実の父親に抱かれるように、その人の胸の中に飛び込んでいく姿が見えたのです。

ロレインは私たちのもとを去りました。でもヒューズ兄弟は何度も何度もやって来ました。

1年後に、神殿の中で、家族の結び固めの儀式を受けた時、ロレインもそこにいるという聖霊の証を受け、私たちは共に涙を抑えることができませんでした。そしてそれから数日後に、私は神殿結婚をしました。

私はよくロレインのことを考えます。そして、そのたびに私はあの素晴らしいホームティーチャーのことを思い出します。彼こそが私たちに再び祈ることを教えてくれ、悲劇を永遠の希望に変える唯一<sup>ただ</sup>の道を示してくれた人なのです。



# ホームティーチャー の祝福

デリス・シャン・ストウクス

**家**族の中で自分だけが教会員だった私は

1976年26歳の時にホームティーチャーから祝福を受けました。その祝福は3カ月程で成就しましたが、そこに至るまでは紆余曲折を経なければなりませんでした。

その当時の私は、信仰こそ堅く保っていたものの、心には苦痛がありました。個人的な事柄で大きな試しをかいくぐってきたばかりの時だったのです。また私は永遠の伴侶となるべき高潔な男性の現われを心の底から待ち望んでいました。私は霊的にも、知的にも啓発し合うことのできる人を夫として求めていましたが、私の住むタスマニアにはごくわずかの教会員しかいなかったため、そのような男性を見つけることはとてもできないものと思っていました。

私はその年の終わり頃にアメリカを訪れる計画を立て、その計画と自分の生涯の転機についてホームティーチャーであるJ・E・プレブル兄弟から祝福を受けました。ところがその祝福で、私が年の瀬も押し迫った頃にアメリカへ旅立ち、その後3カ月以内に永遠の伴侶にめぐり会うことが述べ

られたのです。そしてその男性が神権者として正しく力を発揮するために私が必要であること、またすべての事柄はあくまで主の方法により、主の定めたもうた時に起こり、私が予想していたような形で成就するとは限らないこと、さらにアメリカ滞在中に神殿に参入して自分のエンダウメントを受けようになることなどが宣言されました。私たちはふたりともその祝福が細かなところまで具体的に触れていることに驚きましたが、聖霊の証によって、神が私の未来を示しておられるのだと確信していました。

12月上旬、アメリカへ出発する時、素晴らしいホームティーチャー、プレブル兄弟をはじめ多くの友人が空港に見送りに来てくれました。その時、プレブル兄弟は私を傍らに引き寄せ、夢の中で私の伴侶となる青い目をした、金髪の小柄な男性を見たと言いました。私は期待と不安の入り混じった気持ちで飛行機に塔乗しました。

アメリカ到着後間もなく私は自分のエンダウメントを受けて27歳の誕生日を祝いましたが、それは心を奮い立たせる素晴らしい経験でした。しかし私の約束の3カ月は間もなく過ぎ去ろうとしていました。1月の末になっても、いまだ「彼」の現われる兆しはありません。家のことで深刻な問題があったのと健康上の理由で2月の中頃にはタスマニアに戻らなければなりませんでした。ひどいホームシックにかかっていたため、帰国するのは本当に嬉しいことだったのですが、もう一方では深い失望感を味わっていました。神に対する疑念のようなものと、自分にはたして価値ある人間なの

だろうかという思いが湧いてきました。

帰国後、私は自分の将来の計画について天父の助けを祈り求めました。当時、聴力がかなり衰えてきていたため、それまでのように教師を続けることは不可能でした。そこで法律学校に入学することに決めました。そして3月の初めには授業が始まりました。初登校の日、ひとりの事務職員とあるクラスの登録簿を調べていたところ、無精な身なりをして、ひげを生やし、むさくしく無作法な感じの男性が近づいてきました。彼はぶっきらぼうな口調で私がどのクラスに行ったらいいかを教えてくれました。彼が私のクラスの教師だったのです。彼の後についてクラスへ行く前に、「いったいあの人はどういう人なんですか？」と事務職員に小声で尋ねたところ、彼女は「ここで教鞭をとっているストウクス教授です」と答えました。

ところがその最初の授業を受けていた時、とても信じられないようなことが心に浮かんできました。その小柄な人は、目は青く、頭は金髪、その上、たとえ教師と生徒という異なった立場であっても、学問上の関心から、私とクラスを同じくしたのです。私は思わず、「まさか、この人が。そんなはずがないわ。彼は教会員でもなければ、歩んでいる道があまりにも違い過ぎる。それに学究肌の人はそう簡単に教会には入らないし」と心の中でつぶやいていました。

約1週間後、マイケル・ストウクスは私にデートを申し込んできました。私はなんとか口実をもうけて断りました。しかし、その次の時には、デートを申し込むという風ではなく、昼食を一緒にするように強引

な態度で迫ってきたのです。気がついた時には、私は約束をさせられていました。彼が並々ならぬ人物であるということがわかるまで、それ程時間はかかりませんでした。心底から親切で、思いやりがあり、優れた才能に恵まれた人でした。過去にはオックスフォード大学のローズ奨学生として見事な成績で法律学の学位を取得し、スポーツマンとしても優秀な人物だったのです。しかしそれにもかかわらず、彼が教会員でないことには変わりはありませんでした。

2カ月後、聖霊による確認を得た私たちは結婚に踏み切りました。そしてそれから2カ月後に彼は教会の会員となり、後に私たちはニュージーランド神殿で永遠の結び固めを受けました。そして今ふたりのかわいい娘に恵まれています。よく考えてみると、私たちが初めて会ったのは、私がアメリカへ出発した時から数えて2カ月と27日目のことでした。

私は教会員が非教会員と結婚しても、その連れ合いが教会員になるというケースは非常に少ないことを知っています。しかし皆無というわけではありません。非教会員との結婚については、聖霊に従うことこそが唯一確実な導きを得る方法であると思います。私の場合には確かにそうすることによって祈りに対する答えを得ることができました。

天父は御自身の約束を必ず成就されます。ただそれは、神御自身が定めたもうた時と方法に従って成就されるのです。

# 完成を目指して

デレック・A・カスバート



「博識な律法学者たちはイエスの成熟度に舌を巻きました。」

自分の学んでいる学問が社会科学あるいは地震学、数学、音楽、生物学、植物学、言語学、法学など、いずれの分野にせよ、人は皆例外なく、本分、言い換えるなら、完成を目指す務めに打ち込んでいます。

30年と少し前の大学時代、私は「成熟度——優」という評価を受けていました。確かに、英国空軍兵としての3年半にわたる軍務、また結婚もし、幼ないひとりの娘の父親でもあったという点から見れば、その格別の扱いも納得がいきます。しかし、私に「成熟」した学生という評価を下した人が、ウェブスターの「十分な発達を遂げた……特質、状態」という広く認められている定義に照らし合わせずに評価したことは疑うべくもありません。

私は本当の意味で、成熟していたのでしょうか。インド、ビルマ、香港での軍隊生活で私は成熟した人間になっていたのでしょうか。確かに戦争体験というものは多くの面で人を老練にし、旅は見聞を広めさせてくれると言います。しかし、それが私たちの理解力を高めてくれるとは限りません。

幼なじみの恋人との結婚は素晴らしいもので、私に新たな責任、多くの機会をもたらし、重大な決定をしなければならないこともありました。しかし、私は結婚によって本当に成熟した人間となったのでしょうか。

果実がいつ熟したかを判断するのはそう難しいことではありません。熟し過ぎたものは一目でわかります。しかし、私たち人

間についてはどうでしょうか。人はある時期を過ぎれば、黙っていても成熟した状態になるのでしょうか。年下の人が年上の人よりも成熟し、背の低い人が高い人よりも成熟することはあり得ないのでしょうか。まだ子供だったイエスが神殿の中で「教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられ」た時のことが思い浮かびます。(ルカ2:46) 博識なユダヤの律法学者たちはイエスの成熟度に舌を巻きました。

私たちに必要とされるのはどのような尺



「果実がいつ熟したかを判断するのはそう難しいことではありません。熟し過ぎたものは一目でわかります。しかし、私たち人間についてはどうでしょうか。」



度でしょうか。高校から大学時代にかけて、私はいやというほど試験を受けてきました。成績の評価がなされ、周囲の期待ほど良くはなかった人もいれば、とても信じられないような好成績を収めた人もいました。知識は成熟度を測る尺度として役に立つでしょうか。ガマリエルの下に学んだタルソのサウロは博学の人でした。しかし、その学識は彼をクリスチャンの迫害へと駆り立てました。そのサウロが、奇跡的な改宗の後にごう宣言しています。「なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。」(Iコリント2:2)何と素晴らしいことではないでしょうか。

私は講義室や図書館に閉じこもりきりで学生時代を過ごしたわけではありません。陸上競技の練習をしてトラックで過ごした時間が随分あります。その結果、私は陸上競技のみならず、ラグビー、クリケットの選手にもなりました。

スポーツの能力が成熟の度合いを測る尺度となるでしょうか。

結婚後わずか2年にして離婚したある立派な女性から私のところへ、一通の手紙が送られてきました。彼女はそこでこう嘆いていました。「夫の頭にあるのはスポーツのことだけでした。ふたりで力を合わせて結婚生活を築くというようなことは眼中にありませんでした。」思うに、その夫という人はプロ野球の選手としては偉大でしたが、

結婚生活を営むまでには成熟していなかったのでしょうか。

それでは社交性についてはどうでしょうか。私は学生時代に、楽しい人間関係を築くための知識、芸術作品の鑑賞能力、お互いの意思の疎通を円滑にする方法などについて何がしかのものを身につけました。これらのものは人の成熟度を測る上で基本となるのでしょうか。他の事柄でもそうですが、これについても、救い主の生涯の中に答えを見いだすことができます。ルカはこう記しています。「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」(ルカ2:52)

ここに鍵があります。つまり、情緒、肉体、霊性、社交性の4つの面でバランスのとれた成長を心がけることです。

私は1948年から50年にかけて、イギリスのノッチングム大学に籍を置いていましたが、その間、末日聖徒になる幸運には恵まれませんでした。人生の目的、どうしたら進歩成長できるか、目標達成に向けてどのような努力が求められるかなどの事柄については、無知の状態でした。学業、スポーツ、社交面ではかなりの水準に達していたのですが、霊的には何か足りないところがありました。宗教は持つことは持っていますが、真剣にそれに取り組むということはいなかったからです。ですから教会に欠かさず行ってはいても、教義的に重要な意味を持つ事柄について質問されたら答えられなかったでしょう。

本当の意味での私の成長が始まったのは、24歳を迎えた頃からです。経済学と法律学を優秀な成績で卒業した私は、繊維製品、化学製品、プラスチックなどを扱う大手の会社の管理業務研修社員として、社会への第一歩を踏み出しました。

入社して数週間後、モルモンの宣教師が、導かれて我が家へ来ました。繰り返しますが、彼らが我が家へ来たのは、そうするように導きを受けたからなのです。主は3人の宣教師を遣わして下さいました。(主は我が家の者たちがかたくなであることを御存じだったのです)

キンボール大管長が会員による伝道の進め方を説いた、あの素晴らしいフィルムストリップを見た人は、人々との交際を深めるきっかけとなるような出来事がいろいろあることを知っていることでしょう。身の周りの変化が、福音のメッセージに対する心をさらに大きく開いてくれた良い例が、私たちの場合でした。私が社会人としての第一歩を踏み出したばかりであったというだけでなく、引っ越しもあり、2番目の子供が生まれたばかりの状態だったのです。

私たちの身辺にはかなりの変化がありましたが、それに続いて、宣教師を通して救いの計画、永遠進歩の計画、つまり人が完全な成長を遂げ、真の意味で成熟することができるようにと神が定めたもうた計画を学び、人生観もまったく変わりました。

こうして宣教師から学んだメッセージが真実であることを知るにつれ、価値観が変

わり、ものを見る尺度も変わりました。私たちはより充実した、意義ある生活に向けて、成長への道を歩み始めました。全身全霊を尽くして申し上げたいと思います。永遠の父なる神の独り子、イエス・キリストは、私たち一人一人の救い主であり、贖い主であります。キリストは予言されていたごとく御自身の教会を回復し、ジョセフ・スミスを初めとする聖なる予言者を通して再びみ言葉を語っておられます。

知恵の言葉については特にそうでしたが、私たちの生活の変わり様を見て、友人のひとりがこう言いました。「酒もタバコもやめるだなんて、そんなことをしてたら、出世はとてもおぼつかないよ。」しかし、間違っていたのは彼の方でした。彼は破産し、私は順調なコースをたどったのです。

私たちのバプテスマはまさに人生の転機でした。「<sup>55</sup>覚りの<sup>11</sup>眼」(教義と聖約110:1)が開かれたのです。バプテスマに次いで授けられた聖霊の賜は、助けと導きと慰めをもたらし、「王国に属ける平和なること」を教えてくださいました。そして私たちはようやく、完成を目指して進むという本来の務めの緒に就いたのでした。

私が最初の辞令を受けたのは、バプテスマを受けたのとはほぼ同じ頃でした。研修を終えたばかりの駆け出しの社員をその任に就けるのは時機尚早であると考え人もいましたが、天の窓が開かれ、什分の一に伴う約束の祝福が慎まじやかな我が家に注がれてきました。(マラキ3:10参照) 私たち

は百分の一の原則に心から感謝しました。そしてそれは今も同じ思いです。この原則に従うのに障害となるものは何もありません。まず最初に百分の一を納めるなら、主は私たちが残り10分の9を賢く用いることができるように助けて下さいます。私はそのことを証することができます。

私たちはこの世の富のことで思い煩ったことはありません。教会員となった時、我が家には車、電話は言うに及ばず、洗濯機も、冷蔵庫も、掃除機もありませんでした。私たちは「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6:33)という主の勧告と約束に常に感謝してきました。また私はこのことが真実であると確かに証できます。私たちには主のみ業をより効果的に進めていく上で役に立つ物が添えて与えられてきました。

その逆もまた真実です。20年たって、私たちは最初に居を構えた所を訪ねてみました。私たちがそこに住んでいた当時、近所にいた人々も何人かいましたが、彼らは昔と比べて何も変わったところがありませんでした。少しも成長していないのです。彼らは福音を拒み、霊的に死んでいました。

私が会社で最初に与えられた大きな責任は、私を驚くほど広範な石油化学という業界の真ただ中に投げ込むような魅力にあふれたものでした。支出、統計、管理業務が与えられ、思いがけず、化学者、技術者たちと顔を付き合わせて働くことになっ



「私たちが現世の旅の第一歩を踏み出し、神に似た者となるための工程を始めるに際して、主はどのような原料を受けて下さったのでしょうか。」



たからです。そして程なく、彼らが用いる専門用語を使ったり、全生産工程の説明図、進行予定表、それに数え切れないほどの計算書、見積書、企画書などを作成したりするようになったのです。原料、製品、副製品、触媒、収益、生産効率など、仕事は実に多岐にわたるものでしたが、喜びも多く、私は仕事を存分に楽しみました。しかし仕事に対してだけではなく、人生に対する理解の目も開かれたのです。仕事の流れと、完成を目指して進むという務めの間には似たところが数多くありました。

そして間もなく、私は石油化学という部門は関連する全工程の一端に過ぎないことを知らされました。何しろその会社の所有

する用地面積は142ヘクタール、全従業員数は約1万を数えていたのです。貨車やトラックに積んだ石油、セルロースなど、ほかにも様々な大きさ、形の荷物が工場の入口をくぐって来る様子はなかなかの見物でした。それが少したつと、美しい織物、利用度の高いプラスチックとなって、工場から出荷されていくのです。そのような奇跡がどうして起こるのか、私には驚きでした。その疑問に対する答えは、仕事上のことを勉強するだけでなく、人間としての完成を目指して進むという務めについて学んでいく内に、明らかになってきました。そこには転化があったのです。私はそのような驚異的な変化の過程が理解できるようになりました。その過程を通して、大量の石油やパルプが衣類などの日用品に姿を変じていくのです。

では人生についてはどうでしょうか。人生もひとつの工程と言えないでしょうか。完成を目指すひとつの工程と見ることはできないでしょうか。私たちが自分に求められる姿、天父が望んでおられる姿に到達するためには、変化、あるいは転化の過程を経る必要があるのではないのでしょうか。

私たちが現世の旅の第一歩を踏み出し、神に似た者となるための工程を始めるに際して、主はどのような原料を授けて下さったのでしょうか。

第1に、私たちの英智です。それは「すなわち、光明と真理」です。

次に霊体ですが、これも永遠の父から与

えられたものです。なぜなら、その御方こそ「たましいの父」だからです。(ヘブル12:9)

3番目は肉体です。地上にいる間、私たちの霊はこの肉体をまといます。

4番目は天与の賜と才能です。「一切の善い賜はキリストから授けられます。(モロナイ10:18)

第5は私たちの「住まうべき地」です。(アブラハム3:24)

そして6番目が、「空しく過すことなかれ」という命の下に与えられた時間です。(教義と聖約60:13)

これらの大切な原料を用いること、より適切な言い方をすれば、転化させていくことがすなわち完成を目指して進んでいく務めそのものなのです。

救い主はこう言われました。「わたしが自分の父の仕事をしなければならないことを御存じなかったのですか」(欽定訳ルカ2:49より和訳) 天父の仕事とは何でしょうか。「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」ことがその仕事だったのではないのでしょうか。(モーセ1:39) これこそが真の意味の成熟であり、神のような属性を身につけるということです。

救い主は「命にいたる門は狭く、その道は細い。」(マタイ7:14)と教えられました。永遠の生命に至る道は狭く細い、試練と従順とを求められる道というだけでなく、一生をかけて歩む長い道でもあります。予言者ニーファイはこのことを強調して、ま



っすぐで狭い道に入ったら「あなたたちはこれからキリストを確<sup>たつ</sup>信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。それであるから、この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』、かくの如く天の御父が言いたもうた。」(II一ファイ31:20)と宣言しました。

石油化学プラントのことに話を戻してみます。最初の工程は分溜<sup>ぶんりゅう</sup>です。つまり、石油を高熱の炉に通して、ガスを初めとする様々な成分に分溜するのです。

今でもそうですが、まだ子供の頃、私はシャドラク、メシャク、アベデネゴの物語に心を打たれました。彼らは神に眞<sup>まこと</sup>を尽くし、偶像礼拝を拒んだために、バビロンの王、ネブカデネザルによって燃えさかる炉に投げ込まれました。しかし王は、3人どころか4人の者が、火の中を何の害も受けずに歩いている姿を見て驚きました。そしてこう言ったのです。「その第四の者の様子は神の子のようだ。」(ダニエル3:25)

皆さんは非難の嵐、誘惑に伴う苦境、「悪しき者の火矢」(教義と聖約27:17)に耐えることができますか。主は私たちが徳という自分たちのよろい<sup>よろい</sup>にほんのわずかな亀裂さえも生じさせるようなことを欲してはおられません。主が望んでおられるのは、私たちが真理、義、信仰を身にまとい、傷を受けることなく切り抜け、私たちの内にあるみたまによって平和の福音を説きに出て

行くことなのです。もし「神の御子でキリストである私らの贖い主の岩……人がその上に立つと倒れることのできない基」(ヒラマン5:12)の上に自分自身を築くというのであれば、私たちはそうするはずです。

私は多くの人にこういう質問をしたことがあります。「あなたは心安らかに生きたいですか。それとも不安感を持って生きたいですか。」答えは例外なくこうです。「もちろん安らかな心でいたいですよ。」しかし、その返事とは裏腹のような行ないをする人が非常に多いのはどうしたことでしょうか。清くないこと、人格を落と<sup>おとし</sup>めるようなことは、それをするのはもちろん、考えるだけでも、心の安らぎを奪います。聖霊が退き去るからです。「主の『みたま』は清くない殿に宿りたまわない……のである。」(ヒラマン4:24)

石油化学部門での経験は私に思考の糧を与えてくれました。分溜の過程で粘度の高い油が次第に残っていきますが、それはさらに精製されて、様々な有益な製品に分けられていきます。精練という原則は何百年何千年もの間、鉱業技術の中で極めて重要な位置を占めてきました。特に貴金属についてはそれが言えます。

主御自身が「金をふきわけ<sup>ふきわけ</sup>る者の火」(マラキ3:2)のような御方であり、私たちもその模範に倣うなら、自分自身の中から無価値なもの、不要な物を追い出すことができます。そのことを念頭に置いて、次のように自問してみてください。「私は1週間前、

1カ月前、1年前と比べて清くなっているだろうか。」「不純なもの、不用なものを取り除いてきたでしょうか。」「成長の妨げとなる習慣を克服しているだろうか。」

完全な者となるための務めの中で重要なのは転化の過程だけではありません。転化の効率ということもその中にあります。私たちは先に述べてきた神から授けられた原料をどれほど効率的に転化させているでしょうか。生活の中にどれほどの変化が生じているのでしょうか。無駄に使われた時間、眠ったままの才能、英知がどれほどあるでしょうか。頭脳、精神、気力、才能、空間、時間など、これらはすべて私たちの管理の職に含まれるものばかりです。恵み深い天父がそれらを与えて下さったのは、私たちが誤用するためではなく、模範と奉仕の生活へと転化させるためなのです。「およそ何人<sup>び</sup>にまれ、忠実にして正しく、且つ賢き管理人はその主の悦びに入りて永遠の生命をつぐべし。」(教義と聖約51:19)

共にイエス・キリストの福音を学ぶ者として、私は皆さんの忠実さを賞賛します。しかしさらに忠実さを増し加えていくようお願いしたいと思います。皆さんが数多くの活動や学習の分野で成し遂げてこられたことを称えたいと思います。しかし、なお一層勤勉であっていただきたいと願っています。これまでに培われてきた靈性を賞賛します。そしてなお一層高い靈性を身につけるように願うものです。

私はパウロの言葉を借りて次のように祈



「私は皆さんの忠実さを賞賛します。しかしさらに忠実さを増し加えていくようお願いしたいと思います。」



りたいと思います。「わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。

それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった。」(Iコリント2:4-5)

またこうも祈りたいと思います。全能の主のみたまによって「われらの心を非常に改めさせ、悪を行う性質をなくして常に善を行なう望みを与え」たまえと。(モーサヤ5:2) これこそがベンジャミン王の説教に、人の生活を変える力を与えたものなのです。

ひとつのたとえ話をしましょう。ひとりの人がいました。彼は自然の美に浸ってみ

たいと考え、美しい川の流に沿って森を散策しました。神の創造のみ業の素晴らしさに心を奪われていた彼は、木の根が水際まで伸びて道をふさいでいるのに気づきませんでした。その根につまずいた彼は、まっさかさまに川に落ちてしまったのです。川は思ったより深く、その上、彼は泳ぎを知りませんでした。大声で助けを求めましたが、流れの中にのみ込まれてしまい、その声はだれの耳にも届きませんでした。顔を水面に出し、もう一度声を振り絞りましたが、助けの手は差し伸べられそうにもありません。彼はまた水中に姿を消し再び浮かび上がってきましたが、その声は力無く、とても人の耳に聞こえるような声ではありませんでした。ところが、その近くを歩いていて、彼の声を耳にした人がいたのです。その人は川に飛び込み、彼を岸に救い上げました。元気を取り戻した彼は、自分を救ってくれた人の顔をまじまじと見詰めながらこう言いました。「何とお礼を言っているかわかりません。あなたは私の命を救って下さいました。あなたへの愛と感謝の念を伝えるために、何か私にできることはないでしょうか。」

彼を助けたその人は顔に笑みを浮かべて言いました。「それでしたら、たくさんありますよ。」そう言って、どうすればよいかを懇切に教えてくれました。しかし、それから悲しむべきことが起こりました。その時のことが元で、助けてくれたその人が死んでしまったのです。残された彼は悲しみ

ました。しかし心には暖かなものがありました。なぜなら、彼は自分を救ってくれた人への愛と感謝の思いを表わすために、何をしたらよいかを知っていたからです。

これは私たちにも言えることです。私たちの主であり救い主であるイエス・キリストは、人類が生きることができるように、自ら死を選ばれたのです。私たちは自分のなすべき分を知っています。主のみ言葉はこうです。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14:15)

私にとって、イエス・キリストへの証に勝るものは何もありません。イエス・キリストが私の救い主、贖い主であり、全能の神の御子であることを証します。また私は、主が生きたまい、御自身の教会を導き、それを完全な姿に回復しておられること、そして、数々の予言者、特に現在は私たちの愛する予言者スペンサー・W・キンボール大管長を通してみ言葉を伝えておられることを知っています。

皆さんが学び、生活し、チャレンジに励み、決断し、成長していく時に、また「キリストの満ちみちた徳の高さ」(エペソ4:13)を目指して、完成への道を歩んでいられる時に、主のあふれるばかりの祝福が共にあるように願うものです。



**も**う祖母は死にかけているというのに、  
養老院のドアに手をかけながら、私は  
全然別のことを考えていました。私は祖母  
を愛していましたから、もうすぐ逝ってし  
まうのだと思うと、悲しみが込み上げてき  
ました。でも祖父との再会を心待ちにして  
いた祖母のことであり、彼女にとって死  
は祝福とも、長い間待ち焦がれていた、彼  
女の忠実さに対する報いとも思えるのでし  
た。しかし、私の心といえば、死後に待ち  
受けていることに対する確信が得られない

焦りで、いっぱいでした。私は、ある重大  
な決断について悩み、混乱し、心に平安を  
お与え下さいと、主に嘆願していました。  
ですから、祖母の部屋に足を踏み入れた途  
端、私の心を領した平安に、私は本当に驚  
いてしまいました。祖母は泣いていました。  
そして、頬をつたう涙をぬぐいながら、優  
し気に、生涯のことを振り返り振り返り、  
主がどんなに彼女を恵みたもうたかを話す  
のでした。彼女の静かな語調とあふれる感  
謝の念は、私の心からこの世の煩いをぬぐ



ワインザーお祖母<sup>ばあ</sup>さん  
の知恵

コリーン・ライリー

い去ってくれました。私は立ったまま彼女の話に聞き入ってしまい、辺りが暗くなっているのにも気がつきませんでした。実際、彼女は輝いており、やせて死にかかっているというのに、ほの白く光って見えました。

以前感じたことのある、彼女に対する良くない感情は、私の心から消え去り、私は口では言い表わせない程、へりくだった気持ちになりました。いつまでも、いつまでも、このままでいられたらどんなにいいでしょう。私は、私のしわひとつない手を、祖母のしわくちやになった手の上に置きました。そして、何を考えているのかと聞きました。すると祖母は、私が考え続けているながらも、うまく言い表わせなかったことを言いました。彼女は頭を振ると、こう言ったのです。「ねえ、お前。私の思っていることを、お前が全部わかったらねえ。」それから祖母は、私が変わったと言いました。私は、アイメイクアップをしていないせいじゃないかしら、だから少し変わって見えたのよ、と言いました。でも、彼女は私を見てさえもいなかったのです。彼女は窓の方を向いてこう言いました。「そうじゃないの。お前は、ここに入って来た時より変わりましたよ。お前は、先のことばかり気に病んでいる。そして、これから何が起こるだろうと思っているね。」私の両の目から、涙がこぼれ落ちました。彼女の言った通りでした。「心配しなくていいんだよ。主はお前にも、たくさんお恵みを下さるからね。主は、お前をとっても愛しておられるよ。お前は私に似て、こらえ性がないねえ。そして、自分に準備ができていても、いなくても、主に何かを申し上げようとしているね。」

彼女は、にっこりとして言いました。「私

は、こらえ性がなかったから、いつも主を試みてきたよ。今、生涯の終わりに来て、それでも私を愛して下さっていることが、本当に愛して下さっていることが、よくわかるんだよ。」話し終えると、祖母の頬をつたって、涙が流れ落ちました。私は声こそ立てませんでした。祖母の涙を見ていると、もう、たまらなくなっていました。その時、私たちは、お祖母さんと孫ではなく、同じ神様の子供として、何かを共にしていたのです。ウィンザーお祖母さんと共に過ごしたこのひとときを、私は一生忘れないでしょう。時が来て、彼女と一緒に住まうようになる時には、彼女は私を誇りに思ってくれることでしょう。

私は、私たちよりも偉大なある御方が本当においでになるという証を胸に、養老院の階段を降りました。その御方は、私などが想像もできない程、私を愛して下さっているのです。主は、私をとっても祝福して下さっています。そのことを思うと、私は最善を尽くさずには、いられなくなるのです。挫ける<sup>く</sup>ということとは、自分で自分を罰することなのです。主は、あふれるほどの愛に満ちた神であり、人を憎んだり、怒ったりする御方ではありません。私は、たくさん悪いことをしてきましたが、それでも主は私を愛して下さいます。あの日、祖母の顔を見て以来、彼女の愛を理解できたように思います。それに、知恵、謙遜、平安、——そう、あのあふれる平安も。この時感じたことを、永遠に朽ちることのない石の板に書くことができたらいいものをと、私は思わずにはいられないのです。

\*編者注：コリーンは、祖母の死の3年後に自動車事故で他界した。上記の話は、彼女の日記から採ったものである。

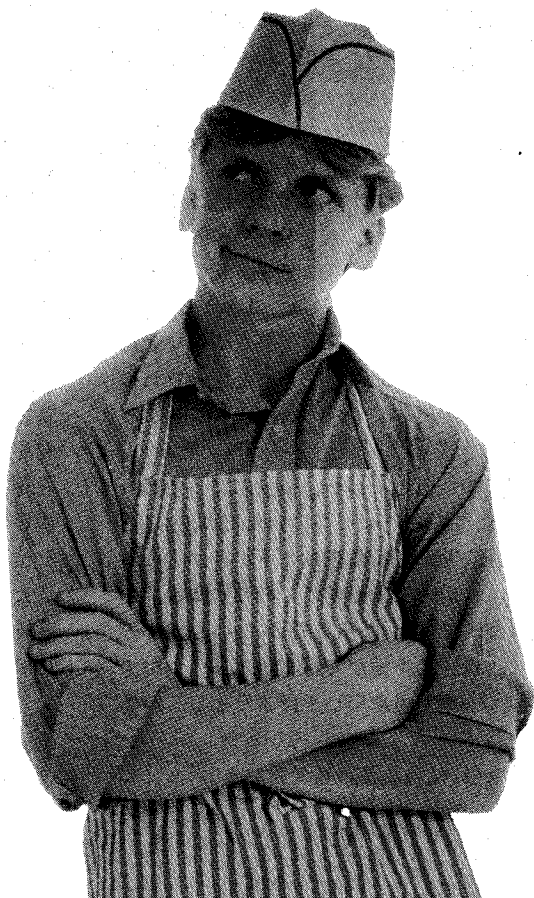
15歳のある日、総大会の神権会に出席しての帰り道にピザ・パーラーに立ち寄ったことがあります。それがきっかけとなって、私は什分の一について忘れることのできない教訓を得ました。父も兄も私もおなかをすかしていましたが、私は注文したものが来るのを待っている間に、ひとりの友達がそこでテーブルの後片づけをして働いているのに気づきました。アルバイトの口があまりないのに、どのようにしてその仕事を見つけたのかと聞くと、店ではもっと人手を求めているとのことでした。

数分後、彼はまた私たちのいたテーブルに戻って来ました。店長がすぐにでも面接をしたいと言うのです。おそらく私がネクタイをしめ、きちんとした身なりをしていたからでしょう。店長は良い印象を持ってくれた様子で、面接は順調に進みました。私が日曜日は休ませて欲しいと言うと、代わりに日曜出勤する社員は幾らでもいるので、何の問題もないとのことでした。そしてできるだけ早い時機に出勤するということで採用になりました。

その後2年間、一つ一つ努力を重ねてい

「私を試みなさい」

スコット・R・メイヤーズ



ったかいあって、ピザ料理を任せられるまでになりました。

ところが、ある日の夕方、仕事を始めようとして、ふと勤務当番表を見ると、予定されていた私の出勤日が1日削られているのです。店長が言うには、もし決まった時間数働きたければ、日曜日に出勤して欲しいとのことでした。それで私は日曜日に働いてみましたが、気持ちの良いものではありませんでした。それ以来安息日に働くことは断わるようにしましたが、以来店長との関係はまずくなり、結局は、別の仕事を探すようになりました。

しかし、おかしなことに、安息日を聖く守ることについては堅く心に決めていた私にも、もうひとつの戒めである什分の一の律法を守ることについてはいい加減なところがあったのです。

両親に言われなければ、什分の一を納めることはありませんでした。言われれば「はい、はい」とうさそうに返事をして、翌週になって、幾らかのお金を封筒に入れるという程度だったのです。私には、なぜ一生懸命働いて得たお金の一割も投げ出すようなことをしなければならないのか、その理由がわかりませんでした。

私は別の働き口を探し続けていましたが、ことは思うように進みませんでした。それでも私は、天父の助けによって必ず新しい仕事を見つめることができると信じ、心から祈りました。しかしある晩、祈っている時に、私はひとつのことに思い至りました。「今の仕事で稼いできた収入の什分の一を払ってもいないのに、どうして主の助けが得られるだろうか」と思ったのです。私は次のふたつの聖句の意味について、心に深く考えました。

「これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:10)

「汝らわが言うところを行わば主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82:10)

私は什分の一の戒めに従う決心をしました。銀行に行き、それまでなおざりにしていた什分の一を納めるために、かなりの額のお金を引き出しました。そしてその日の夕方に監督の家を訪れ、什分の一を手渡したのでした。

私はもっと良い働き口を求めて、ある自動車の消音器を扱う店に就職の申し込みをしました。それをしたのは1月でしたが、その店では、次の12月まで、新たに人を採用する予定はないというのです。ところが什分の一を納めて2日後に、その店から電話があり、翌日から働いて欲しいというのです。こうして伝道に出る頃には、私の固定給は前の職場にいた時の3倍になり、なおその上に、かなりの額の歩合給も受けていました。お陰で伝道のための費用の半分は自分の収入で賄うことができました。その上伝道に出て1年ほど経った頃に、その消音器の店の主人から両親に電話があり、伝道費用の残りを援助させて欲しいと言ってきたのです。

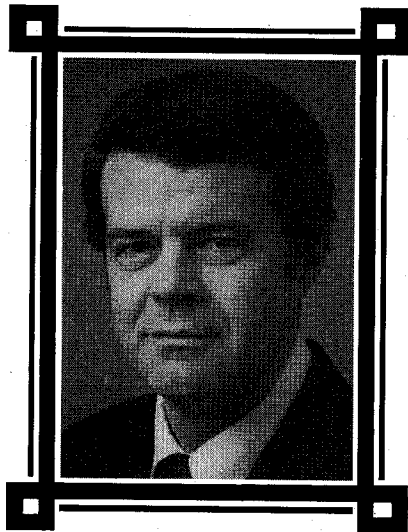
これらのことを単なる偶然であると言う人がいるかも知れません。しかし私は、これは自分がひとつの福音の原則を何とか実践するようになり、その結果与えられた祝福であると思っています。什分の一は主の祝福への扉を開いてくれるのです。



小さなお友だちへ



ポールマン<sup>ちよう</sup>長老<sup>ろう</sup>のお話



だいいちていいんかい七十人第一定員会のロナルド・E・ポールマン<sup>ちようろう</sup>長老に、インタビューしたところ、こんなお話をしてくださいました。

「わたしは、子どものころ、あまりのしくはありませんでした。6人きょうだいの一ばん上だったので、いろいろなせきにんがあって、いやだったのです。お父さんやお母さんのいうことを、きちんとしようと思えば、いつも、何かをしん

ばいしていなければなりません。今でも、よその家へ行くと、わたしは一ばん年上の子に、『一ばん年上って、どうだい?』と、たずねます。こんなおもしろいことをいっていた子もいましたっけ。

『ぼくは、学校が大すき。読み書



きは、とくにすきだよ。ひとつ字が読めるようになって、いろんなものが読めるんだもの。だから、小さいころから、ぼく、しんぶんが読めたんだよ。ぼく、とってもよく、べんきょうしたよ。』

ポールマン長老は、子どものころ、お母さんから聖典のお話をならったそうです。「わたしの母は、アイロンかけをしながら、よくお話をしてくれました。わたしは、そばにすわって、じっときいていました。そう、よく聖書のお話をしてくれましたよ。それは、母がのこしてくれた、すばらしい思い出ですね。父も母も、教会にはとてもかっぱつで、よくはたりました。そのころ、わたしの家は、あまりお金がありませんでした。へやは、おうせつまと、小さなおふろばを入れて、4つしかありませんでした。今、わたしはひとりで、おふろばが3つもあるマンションにすんでいますから、その時とくらべたら、天国のようです。

そのころは、こまっている人がたくさんいました。父は一年半も、しごとがありませんでした。わたしは、きょうだいの中で、一ばん年上だったので、母は、わたしのことを、とてもたよりにしました。ですから、

~~~~~

「天のお父さまは、みなさんが  
何をしたか、どうかんじたか、  
何でもきいてくださいます。」

~~~~~

わたしは、子どものころから——せきたんのねだんがいくらとか、お金がこれだけあれば何カ月くらせるとかいうことまで、知っていました。

でも今は、子どもやまごたちにかこまれて、ゆたかなせいかつをしています。わたしには、6人のまごがいて、7人目が、もうすぐ生まれます。一ばん上のまごは、ついこのあいだ、7さいになりました。今は、おじいちゃんになって、とてもたのしいです。子どもたちや、まごたちを見ていると、もう一ど、子どものころにもどったような気がします。ほんとに、たのしいですよ。

わたしの父と母は、とくべつにべんきょうしたわけではありませんでしたが、おんがくが、とくいでした。父のウクレレしか、がっきがなかったころは、かぞくみんなで、うたをうたいました。わたしが中学生になったころ、父と母が、はじめて、レ

コードプレーヤーを、かってきました。みんな、大よろこびでした。大きくなってからは、ピアノもかってもらいましたし、小さいおとうとや、いもうとたちは、レッスンもうけました。わたしのつまは、おんがくをべんきょうしていましたから、デートのときは、とてもたのしみでした。わたしは、つまがバッハのきょくをひくのを、むねをおどらせながら、ききました。

ポールマンというのは、オランダの名前です。わたしのおじいさんは、オランダで生まれましたが、わかいころ、南アフリカにわたりました。そこで、スコットランド人の少女だったおばあさんと、けっこんしました。そして、子どもがひとり生まれ、イギリスへもどりました。それから、つぎつぎに子どもが生まれ、グラスゴーへ行き、スコットランドへ行き、そこで、わたしの父が生まれたのです。せんきょうしたちが、チラシをくばりにきたのは、このスコットランドの家でした。そこはアパートの3がいで、水道がついているだけのところでした。それでも、せんきょうしは、レッスンに来てくれました。ひとりのせんきょうしは、A・Z・リチャーズといましたが、しぬま

で、おじいさんの家ぞくといっしょに、くらししました。わたしも、そのせんきょうしが、大すきでした。

それから、わたしがオランダへでんどうに行き、3人のおとうとたちも、オランダへでんどうに行きました。わたしの父も、オランダで、でんどうしました。オランダでは、おじいちゃんのきょうだいたちに会うことができました。それに、オランダごも、ならいました。

天のお父さまは、みなさんひとりひとりを、いつも、あいしておられます。わるいことをしたときも、あいしてくださいます。もちろん、かなしまれますが、だからといって、もう、あいしてくださらないということではないのです。いつも、おいのりをしてください。天のお父さまは、みなさんが何をしたか、どうかんじたか、何でもきいてくださいます。

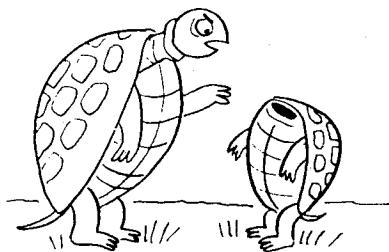
天のお父さまは、いましめをまもっている子だけをあいして、まもらない子はあいしてくださらないと、思うことがありますね。でも、それはちがいます。それはサタンが、そう思わせているのです。天のお父さまは、いつも、何をしても、わたしたちをあいしておられるのです。

# おもちゃばこ

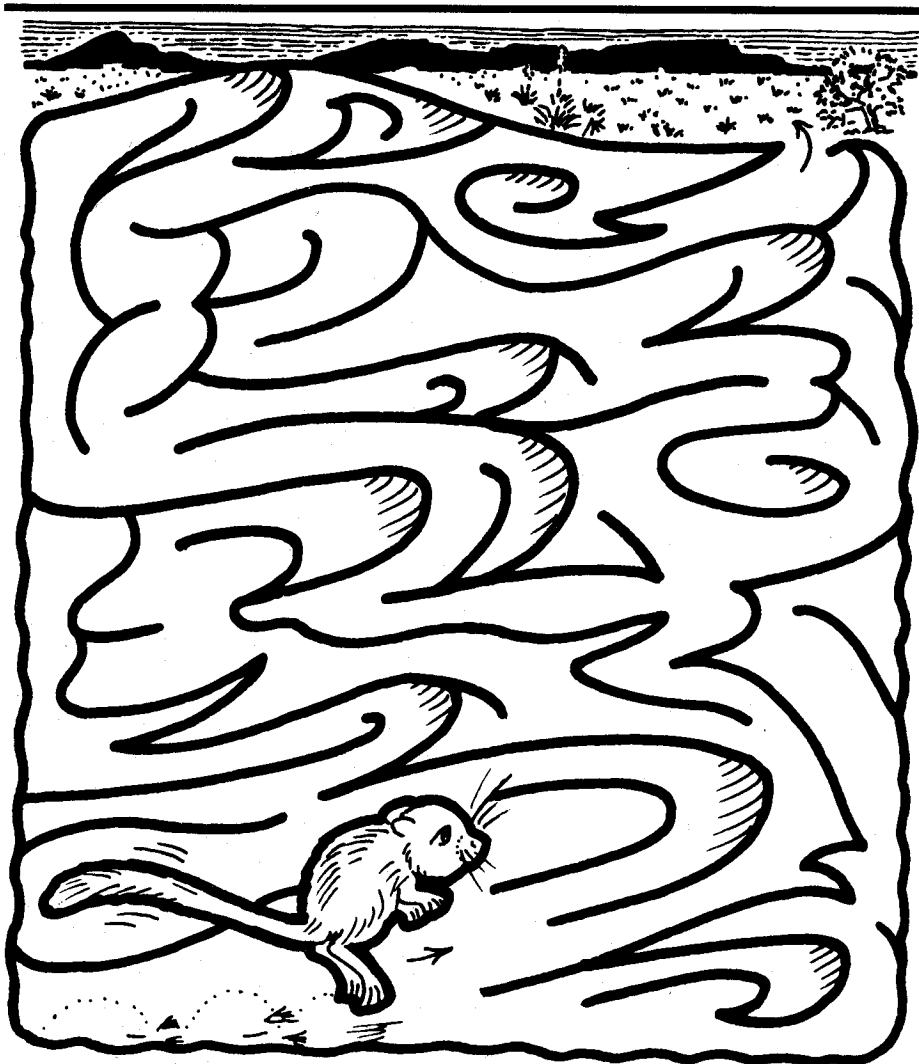
めいろ      ロバータ・L・フェアラル

カンガルーネズミくんは、しつぽで小さなからだをささえながら、さきゆうを、ピョンピョンとんでいきます。どのみちをいったらあなにおちないで、きのみや、はつばがたべられるかな。

イングルマン



「ひとのはなしをきくときは、かおをだしなさい!」



夏の日ざしが、おいらのせ中に  
てりつけて、ひたいからあせ  
がポトポトと、ながれおちた。きり  
かぶのねっこのあいだに、おりやり、  
てこをうちこんでいると、田ちゃん  
の声がした。

「トット、父ちゃんがかえったよ。」

おいらはてこをなげすてて、はた  
けの土をけちらしながら、家へとん  
で行ったんだ。せんたくもの下を、  
ヒョイヒョイくぐりぬけて、走って  
行くと、あやうく馬車にぶつかりそ  
うになっちまった。

「ここだよ、ほうず。こなのぶく

ろを、田ちゃんのところへ、もって  
行っておくれ。」

おいらは馬を馬車からはなしてや  
ってから、家に入った。ちょうど、  
父ちゃんが田ちゃんに、何かのつ  
みをわたしているところだった。

「モスリン（ぬのじ）、20ヤード  
だ。」

「まあ、ありがとう。」田ちゃんは、  
しあわせそうだった。田ちゃんは、  
ひもをほどき、紙づつみをあけた。

「このひもで、ボールが作れるわ。  
それに、紙はべんきょうにつかえる  
ねえ」といって、おいらにひもと紙



# ざいさん

ベティ・ルー・メル



をくれた。おいらは、そこにすわりこんで、ひもをまいて、ボールを作りながら、つぎは何が出てくるかと、わくわくしながら、見ていた。そして、さいごのさいごに、父ちゃんはポケットに手をつつこんで、シナモンキャンディーをとり出したんだ。おいらはよだれがこぼれそうになって、キャンディーに、おしゃぶりつこうとすると、母ちゃんが、おひるごはんだよ、といったんだ。ああ！父ちゃんが、おいのりをし、おいらと母ちゃんは、あたまを下げて、きいた。

ごはんのあいだ、おいらは、父ちゃんと母ちゃんの話をかいていた。

「町で、エド・ピースリーに会ったよ。やつこさん、この土地をうらっているんだ。」

おいらはびつくりして、ふたりのかおを見た。

「それで、何ていったの。」母ちゃんは、うわづった声で、いった。

「しかし、いい話なんだなあ。」

母ちゃんは、目をまるくしていた。

「土地をうられば、ほしいものが何でもかえる。」

「あんたったら、話をそらさないでちょうだい。それで、エドに何て



いったのさあ。」

父ちゃんは、じょうだんをいうときのように、目をキョロキョロさせて、いったんだ。「だめだって、いったよ。」

母ちゃんは、ほっとしたかおになって、父ちゃんのそばに行つて、キスした。そして、ふたりでわらつたんだ。

「わたし、ときどき、あんたが何をかんがえているのか、わからなくなるよ。」母ちゃんは、いったんだ。

ごはんがおわると、父ちゃんは、おのをもつて、外へ出て行つた。

「よく、ほりかえしておいてくれたね。ところで、読み書きのれんしゅうは、おわつたのかい。」

「うん。でも、おいら、読み書きはきらいだ。」

「きらいだって、どうしてだい。」

「だって、思うように書けないんだもん。」

父ちゃんは、また大きな声でわらつて、おのを地めんにおろし、シャツをぬいで、きりかぶを見ていた。

「まだ、手がなれてないってわけだな。つづけていれば、なれてくるさ。」

父ちゃんは、きりかぶのところになつて、ねっこをたぐつた。

「まだ、ふといねつこが切れていない。こいつを切つてしまえば、かんたんに、ひつくりかえせるんだが。」

父ちゃんは、おのをつかつた。おいらはよこになつて、見ていた。ねつこが切れると、父ちゃんは、おいらのよこにしゃがみこんだ。

「これからが、大しごとだ。そうだろう、ほうず。」父ちゃんは、いきを切らせながら、いった。

「父ちゃん、はたけをうろうと思つたの？ そうすれば、はたらかなくてすむから？」と、おいらはきいてみた。

父ちゃんは、しばらくだまつていたが、やがてにつこりわらつていったんだ。「金は入つて来るが、出て行くものだ。しかし、土地は、ずっとここにある。うりやあしないよ。わしらがお前にのこしてやれる、ざいさんだからな。」

「ざいさんって？」

「ざいさんってのは、じぶんのすきな人にあげることでできる、こうかなものことだ。それを、どうしようと、かつてだ。人によって、いろいろだ。エドは、土地なんか、切つて、うるものだと思つている。」父ちゃんは、土をにぎつていった。

「においをかいてごらん。この土から、青々としたさくもつがとれるんだ。手入れをするのは大へんだが、土はわしらがしんせつにしてやると、わしらにも、しんせつにしてくれる。きりかぶや、石や、ざっ草をとってやらなくても、土はもんくをいわないが、さくもつがとれなくなる。だから、てまひまかけて、たがやすんだ。ちょうど、お前がちゃんと文字を書けるように、手をたんれんするのとおなじだよ。いつか、むくわれる時が来る。」

父ちゃんは、立ち上がって、いった。「さあ、よくやすんだ。きりかぶをひっくりかえしてしまおうか。たくさん、さくもつがとれるようになるぞ。」

父ちゃんがてこをおすと、きりかぶはかんたんに、もち上がった。おいらは、父ちゃんといっしょに、力いっぱい、てこをおした。きりかぶは、メリメリと音を立てて、ひっくりかえり、あとには、大きなあながあいた。父ちゃんは、大きな声でわらったんだ。父ちゃんのかおからは、たきのようなあせが、ながれていたよ。父ちゃんは、おいらのかたに手をあいて、いった

んだ。「やったぞ、ほうず、やったぞ。」

「まあまあ、ごくろうさん。」母ちゃんが、はたけをよこぎって、やって来た。「つめたい水だよ。」母ちゃんは、コップをおいらにわたすと、父ちゃんといっしょに、木かげに行きつてすわった。おいらは、ほうでじぶんの名前を書くれんしゅうを試してみた。そして目を上げると、トウモロコシや、ニンジンの、長いみどりのうねがつづいていたんだ。

おいらは、なぜか、わらい出したくなったんだ。この土地をぜんぶたがやすには、長い年月がかかると思うよ。でも、この土地は、いつかおいらのものになるんだ。そのときには、はたらきものの父ちゃんや母ちゃんを、どんなにじまんに思うことだろうなあ。



# 不変の原則

第一副管長 N・エルドシ・タナー

**第**2次世界大戦中に、十二使徒定員会会員のアルバート・E・ボーエン長老は、ラジオでの一連の説教をまとめた「不変の原則」(Constancy amid Change)と題する本を著わしました。この中には、実に時宜にかなったメッセージが盛り込まれています。当時の世の中は争いに満ちており、世界中の人々が確信と平安をもたらす不変のメッセージを求めているのです。

現代の世も、戦争の繰り返された当時とよく似た面が数多くあります。私たちは現在、数々の困難な問題に直面しています。国際間の重要な政治問題に加えて、ここ数十年来最悪の経済危機、すなわちインフレと個人の財政管理の問題とを抱えています。

私はボーエン長老の著書のタイトルをお借りして、60年間の勤労生活から得た確信と私個人の経験についてお話したいと思います。私は様々な経済状態を経験してきました。社会に出て間もない頃、金銭的に困窮したことがありました。国内の不況や世界的な大恐慌を経験し、景気後退やインフレの時代をくぐり抜け、世に言う解決策が経済状態の変遷と共に現われては消えていく様子をこの目で見てきました。その結果、私はロバート・フロストと同じ確信を持つに至ったのです。彼は次のように述べています。

「人の思いが変わり、世が移り行く、

すべては、受け入れる真理、  
拒む真理に起因する。」

(エドワード・C・レイ・サン編、*The Poetry of Robert Frost*「ロバート・フロスト詩集」p. 58)

これからお話すことは、いつまでも変わることはない基本原則に対する私の考えです。この原則に従うならば、いかなる経済状態が来ようと、財政的な安定と心の平安を保つことができるでしょう。

まず最初に、基本的な事柄と将来の見通しについて考え、この経済原則の適用範囲を明らかにしたいと思います。

## まず神の国を求めよ

ある日、孫が私のところに来て次のように言いました。「ぼくは、おじいさんを始め多くの成功した人を見てきました。そして、自分も成功した人間になろうと決心したのです。ぼくは、できるだけ大勢の人に会って、成功の秘訣を聞きたいと思っています。おじいさん、これまでの生活を振り返って、成功するために一番大切な要素は何だと思いますか。」

私は主が与えて下さった最も偉大な成功の公式を引用しました。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイ6:33)



皆さんの中には、神の国を第一に求めなくても経済的に豊かな人がいる、と言って反論する人もいるでしょう。確かにその通りです。しかし、神の王国を第一に求める人に、主が約束しておられるのは、物質的な富だけではありません。私自身の経験からもわかりますが、先の反論は当を得ていません。ヘンリック・イブセンは次のように述べています。「金銭は物事の外皮であって核心ではない。金銭によって食物は手に入っても、食欲は手に入らない。薬は買えても、健康は買えない。知人はできて、友人はできない。召使いは雇えても、忠実な人は雇えない。楽しい日々が続いても、そこに平安と幸福はない。」(The Forbs Scrapbook of Thoughts on the Bussiness of Life「フォーブスの仕事に関する名言集」p. 88)

### 物質的な祝福

物質的な祝福は、義しい目的をもって義しい方法で求める時に、はじめて福音の一部となるのです。ここでヒュー・B・ブラウン副管長の経験を思い起こしてみましょう。第1次世界大戦の時に若い兵士として働いていた彼は、ある日、年輩の友人を見舞うために病院を訪れました。この友人は80歳になる大富豪ですが、今や死の扉の前に立たされていました。離婚した妻や5人の子供のうち、だれひとりとして病院に見舞いに来る者はいませんでした。ブラウン長老は、友人が失ってしまった、金銭では買うことのできないものについて考え、彼の悲劇的な状態と悲しみの深さを思いやりました。そして、こう尋ねました。「もう一度人生をやり直せるとしたら、どのように生活を変えたいと思いますか。」

数日後に他界したその老紳士は、次のように答えました。「今振り返ってみれば、私は最も大切で価値ある財産を確かに持っていたと思う。しかし、巨万の富を築く過程でそれを失ってしまった。その財産とは、私の母が神に対して、また人の不死不滅に対して持っていた純粋な信仰のことだ。…君は人生で最も価値あるものについて尋ねた。私にはその答えとして、あの詩以上に適切な言葉は浮かんでこない。」彼はブラウン長老に、書棚から一冊の小さなノートを取り出して「私は異邦人」という詩を読むように言いました。

母の教えた信仰を捨て

私はひとりの異邦人。

母の求めた神を忘れ

私はひとりの異邦人。

祈りによる慰めもなく

私はひとりの異邦人。

死んだ父を抱きかかえた

永遠のみ腕も私にはない。

きらびやかな世界に誘われて

私はすべてを捨て去った。

盲目となった私は

神のみ手からすべり落ち

目のくらんだ私は

空しい名声を追い求めた。

きらきらと光を放つ黄金に

人生のすべてををかけていた。

やがて勝利者となった私は

限りない報酬をこの手にした。

しかし、名声も、黄金も、快樂も

すべての財産を投げ与えよう。

私の母を支えていた

あの信仰さえ得られるなら。

ブラウン長老は、次のように記しています。

「これが、教会員の家庭に生まれながら教会から離れていった男の最後の証である。莫大な財産を手に入れたが、この世の富を築くために最も大切なものを失い、孤独と絶望の淵に沈んだ男の叫びである。」

(*Continuing Quest* 「永遠の問い」pp.32-35)

モルモン経の中で、予言者ヤコブは次のように重要な勧告を与えています。

「財産を求める前にまず神の王国を求めよ。あなたたちがすでにキリストに望みを持ってから宝を求めたならばその通りに宝が手に入るであろう。しかし、その時あなたたちがその宝を求める目的は、裸でいる者に着物を着せ、飢えている者に食を与え、束縛されている者を救って自由にし、病んでいる者と悩んでいる者とを救うなど、およそ善事を行うことである。」(モルモン経ヤコブ2：18-19)

基本となる観点は以下の通りです。まず神の王国を求め、効果的な計画を立てて実行し、賢明に時間を使い、将来の設計をし、そして与えられた財産を神の王国の建設のために役立てることで。この永遠の観点から物事を見通し、固い基盤の上に立って生活するならば、入念な計画と熱意をもって遂行すべき人生の目標や日常の仕事に、自信を持って対処できるようになるでしょう。

この考え方に基づいて、経済的な安定を図るための5原則について説明したいと思います。

## 原則1 正直に什分の一を納める

什分の一を納めることは主や教会に対する寄付であると考えている人がいないでしょうか。什分の一を納めることは、主に対する負債を返済することです。主は、私た

ちの生命も含めてあらゆる祝福の源となる御方です。

什分の一を納めることは戒めであって、ひとつの約束を伴っています。すなわち、この戒めを守るならば、「地に於て栄ゆべし」(アルマ50：20)という約束がそれです。この繁栄は、物質的な事柄だけにとどまりません。健康や精神の活力、家族の一致、霊性の高揚などももたらされます。皆さんの中に什分の一を完全に納めていない人がいるならば、その人は戒めに従う信仰と勇氣とを求めて下さい。創造主に対する義務を遂行するならば、この戒めを守る者にしかわからない実に豊かな幸福を味わえるでしょう。

## 原則2 収入の範囲内で生活する

何でも買えるだけの収入を得ることなどできる訳がありません。私は確信を持って言いますが、人の心に平安をもたらすものは収入の額でなく、その財政管理です。金銭は従順な僕にもなるし、厳しい主人にもなります。生活水準をいくらかゆとりのある程度に抑える人は、自分の置かれている環境を支配しますが、いくらか収入を超えた範囲に求める人は、環境に支配され、とらわれの身となります。グラント大管長は次のように述べています。「人間の心の中に、あるいは家庭の中に、平安と満足をもたらすものがひとつあるとすれば、それは収入の範囲内で生活することである。反対に人々を苦しめ、落胆させるものがひとつあるとすれば、それは支払うことのできない負債である。」(*Gospel Standards* 「福音の標準」 p. 111)

出費を収入の範囲内に抑える鍵は、簡単

明瞭です。それは自制と呼ばれています。この人生において私たちは遅かれ早かれ、自分自身を制することを学びます。食欲を制し、経済的な欲求を抑えるのです。収入の範囲内で生活し、思いがけない時のために幾らかの蓄えを残す人は、何と祝福されていることでしょうか。

### 原則3

#### 欲しい物と必要な物を 区別する

購買欲は人が造り出すものです。自由競争の経済社会では、限りない商品とサービスが生み出され、それがより便利でぜいたくな暮らしに対する私たちの欲望を刺激します。私はこのような商品やサービスを利用する人、あるいはそれを生み出す経済制度を批判するつもりはありません。私が関心を持つのは、購入に際して末日聖徒が正しい判断力を行使することです。犠牲が永遠にわたる訓練の重要な部分を占めていることを忘れてはなりません。

合衆国や他の国々において、第2次世界大戦後に生まれた多くの両親や子供たちは、繁栄の時代だけを経験してきました。欲しい物がすぐ手に入る時代です。そこには、働く能力を持つ人がすべて働ける十分な職がありました。昨日はぜいたく品であった物が、今日は必需品と考えられる世の中です。

ここで代表的な若い夫婦を紹介しましょう。この夫婦は、両親が長年の犠牲と苦心の末に手に入れたぜいたく品々を、結婚当初から自分たちの家庭に備えようとしてきました。あまりにも多くの品物を早急に求めたふたりは、安易なクレジットに走り、負債の中に身を沈めていきました。そのため、教会が勧める食糧貯蔵や他の非常時に備え

るプログラムを行なう経済的な余裕がなくなっていました。

互いのわがままと粗雑な財政管理は、結婚生活に重大な亀裂を生じます。夫婦間の問題の多くは、経済的なことから始まっているようです。家族を養うのに十分な収入が得られないか、あるいは収入を正しく管理してないか、そのどちらかです。

ある若い父親が財政上の助言を求めて監督のところに来ました。そして、よく耳にする次のような話をしました。「監督さん、私は技術者として十分な訓練を積みましましたから、今では高い収入を得ています。収入を得る方法を学校の教師から学んだのです。でも、その収入を管理する方法はだれも教えてくれませんでした。」

すべての学生が消費者として必要な知識を学校で身につければ、それは望ましいことでしょう。しかし、彼らを訓練する責任は、まず第一に両親にあります。両親はこの大切な責任を学校に任せきりにしたり、転嫁したりしてはならないのです。

### 負債

この訓練を行なう上で重要なことは、負債について説明することです。多くの場合、経済上の負債には2種類あります。すなわち、消費によって生じる負債と投資あるいは業務上の負債です。消費によって生じる負債とは、日常生活で使用または消費する品物をクレジットで購入することです。例えば、洋服や家庭用品、家具などを分割払いで買う場合がそうです。この負債は、将来の収入を担保にして借りたものです。これは非常に危険性をはらんでいます。失業や思わぬ緊急事態に遭遇すれば、返済が困難になります。その上、分割払いは最も費

用のかさむ購入方法です。品物の価格に加えて、高い利子と手数料を取られてしまうからです。

若い夫婦であれば、時にはクレジットによる購入を必要とすることもあるでしょう。しかし、ここで注意しておきたいことは、実際に必要とする物以外は購入しないこと、そして負債はできるだけ早く返済することです。金銭的な余裕がない時に、利子による余計な重荷を負ってはなりません。

投資負債は、家族の生活を保証できる範囲に担保を制限すべきです。投機的事業に手を出してはいけません。投機には、人を酔わせる独特の雰囲気があります。人間の尽きることのない物欲によって、多くの財産が失われてきました。過去の人々の悲劇から学ぼうではありませんか。そして、ますます増え続ける商品を手に入れようと、飽くことを知らない物欲の奴隷になって、時間や労力や健康を浪費することをやめようではありませんか。

キンボール大管長はこの問題について示唆に富んだ勧告を与えています。

「主は私たちに過去の時代には見られない繁栄を与えて下さった。私たちは豊富な資源を支配し、この地上で生活を営んできた。しかし恐ろしいことに、多くの人々は牛や羊、土地や建物、また富に満たされすぎて、偽りの神であるそれらのものを崇拜し始め、それらのものに支配されるようになってきた。私たちの信仰はもはやこれ以上の物資に耐えきれずにいるのではないだろうか。人々は永遠の幸福を願って多くのお金、株、債券、有価証券、土地、クレジットカード、家具、自動車、その他この世の安易な生活を保証するもので身を固めるためほとんどの時間を費やしている。私た

ちの務めは、与えられた豊富な資源を家族や定員会で用いて神の王国を築くことであるという事実を見落としているのである。」(『偽りの神々』『聖徒の道』1977年8月号、p.351)

キンボール大管長の言葉に加えて、このことを証したいと思います。家族の理になった要望や必要以上に財産を蓄えても、決して心の平安や幸福感が増す訳ではありません。

## 原則4

### 予算を組んで、その範囲内で生活する

私の友人の娘さんが、ブリガム・ヤング大学の海外研修プログラムで半年間外国に行きました。ところが、彼女はいつも送金を求める手紙を家に書いてきたのです。友人は心配になって国際電話をかけ、送金が必要な理由を問いました。すると彼女は電話で次のように説明しました。「だってお父さん、送っていただいたお金は、全部使ってしまったんですもの。」

友人は答えて言いました。「わかっているよだね。私が尋ねているのは出費の計画、予算であって、使ってしまったお金の記録ではないんだよ。」

おそらく両親というものは、下宿中の息子から電報を受けた次の父親のようにあるべきでしょう。「カネナシ、タノシミナシ。ムスコ」父親は折り返し電報を打ちました。「キノドクニオモウ。チチ」

長年にわたり大勢の人々と面接して感じたことは、賢明な予算を組み、それにそって自身を抑制できる人があまりにも少ないことです。多くの人々は、予算を組むと自由が奪われると考えています。ところが、成功している人々は、反対に予算が真の経済的自由をもたらすことを知っています。

予算や財政管理をひどく複雑にしたり、そのために多くの時間を使ったりする必要はありません。ある移民して来た父親の話ですが、彼は支払うべき勘定書はくつの箱に、取り立てるべき勘定書は書類差しに、そして現金はレジスターに収めていました。

ある日、息子が次のように尋ねました。「どうしてこんな方法で仕事になるんですか。利益のあったことは、一体何からわかるのですか。」

父親は答えて言いました。「息子よ、私が船から降りた時、身に着けているものと言ったらズボンだけだった。今では、お前の姉は美術の教師になり、兄は医者になった。そして、おまえは会計士だ。私は車や家を手に入れ、良い仕事にも恵まれている。すべてが順調にいった。だから、ズボン以外に数え上げるものはすべて、私の利益なんだよ。」

### 適切な予算の要素

賢明な会計カウンセラーは、適切な予算には4つの要素があると教えています。第一に食料品や衣料品など生活必需品に要する費用、第二に家庭の維持に必要な費用、第三に貯金や健康保険、生命保険など非常時の必要に備えるための費用、そして第四に将来のための賢明な投資と貯蔵プログラムに要する費用です。

この中からふたつの要素を取り上げてみましょう。私たちの生活の中で、思いがけない出来事ほど避けられないものはないでしょう。医療費が高騰する現在、ほとんどの家族にとって健康保険が、大きな事故や病気、あるいは出産、特に早産などの費用を賄う唯一の方法になっています。生命保険に加入すれば、一家の主人が不幸にして

早死にした場合も、遺族は引き続き収入を得ることができます。すべての家族が適切な生命保険と健康保険に加入して、備えをすべきです。

以上の基本条件を満たした上で、事業投資用の資金を作るために節約して定期的に貯金するのです。これは私の意見ですが、定期的に貯金する習慣をまず身につけずに、投資で成功した人はほとんどいません。これには識別力を伴う判断力と自制心が必要です。投資には様々な方法があります。ただひとつだけ忠告すると、投資のカウンセラーを正しく選ぶことです。投資で成功することによって、あなたの信頼を受けるにふさわしい人物であることを確かめて下さい。

### 原則5

### 金銭上の事柄に 正直になる

正直の理想的な姿勢は、決してその姿勢を崩さないことです。教会の指導者や会員として、私たちは正直を絵に描いたような人物になるべきです。

兄弟姉妹の皆さん、私は以上の5原則を通して、模範的な財政管理や予算がどのようなものであるかお話ししてきました。

それらの原則を適用して、私たち一人一人が善い結果を得るように願っています。以上の事柄が真実であることと、私たちの従事するみ業とこの教会が真実であることを証します。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。

\*編者注：これはタナー副管長が1979年10月の総大会福祉部会で行なった説教で、教会幹部の要請により再度「聖徒の道」に掲げるものである。

●昨年のクリスマス話題が各地から寄せられた。今月号では教会内だけの行事から脱皮し、広く地域社会に働きかけることに成功を収め、好評を得たクリスマスの催し物を3つ紹介する。

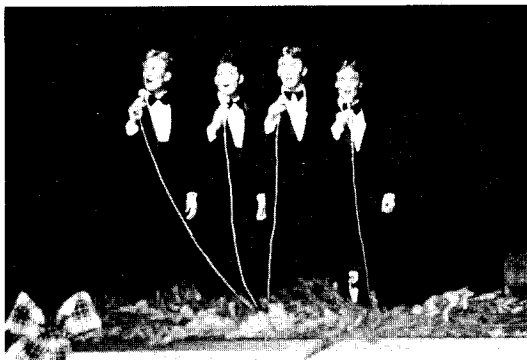
## 伝道部とステーキ部が結束した クリスマスの夕べ——「クリスマスってなあに？」

(日本札幌伝道部伝道部長夫人、堀田幸子姉妹からのお便りを御紹介します)

日本札幌伝道部では、昨年12月22日に、ステーキ部の協力を得て伝道を目的としたクリスマスプログラム「クリスマスってなあに？」を催しました。

札幌市の中央、大通公園に面した教育文化会館を会場として借り、午後6時30分より2時間のプログラムでした。1,000名収容する会場には、招待した真駒内養護学校、養護施設「柏葉荘」、母子寮の人たち約150人を初め1,050名の人々が集まり、ステーキ部の会員たちによるミュージカルと宣教師たちの歌と踊り、その他が演じられました。2カ月余りの熱心な練習の成果は実に素晴らしく、集まった人々の感動を呼び起こさずにはいませんでした。

このプログラムを成功に導くまでに、多くの宣教師と会員たちの準備と犠牲がありました。歌に踊りに演劇に練習を重ねた人々、また陰ながら大道具、小道具、衣装を作って下さった人々、あるいはナレーターとして、また舞台照明、演出の手配をして下さるなど様々な責任を果た



▲教育文化会館で歌う宣教師

して下さった兄弟姉妹、宣教師たち、そのような一人一人の力が、ひとつの目的のために捧げられたのです。その上、多くの人々の祈りが加わり、遂に成功を見た時には、プログラムに参加した多くの会員や宣教師が共に涙し、喜び合いました。主の業のために一致し、力を尽くして働く喜びを心から味わうことができ、また神様の祝福をいただいて、成功することができたという証が得られたことはなお一層喜びを大きいものにしました。

翌日の北海道新聞の朝刊にはこのプログラムが報道され、また夕方6時からのHBCテレビで、プログラムの一部が放映され、末日聖徒イエス・キリスト教会の名を多くの人々が耳にすることにになりました。

◀マスコミでも報道された  
「クリスマスってなあに？」



クリスマスの季節は終わりましたが、一人一人の心に燃えた証の火は、今も燃え続けています。そして、その証を携えて、宣教師たちは今、凍てつくような寒い、冬の北海道の各地で、人人に福音を広めようと頑張っています。

最後に、このプログラムをご覧になったひとりの姉妹からの手紙の一部を紹介いたします。

「クリスマスに、本当に素晴らしい集会を計画して下さい、ありがとうございました。

その会に、友人と一緒に参加して、本当に多くのものを受けることができ、よき機会となりました。

ました。私も、その友も、あらためて自分自身の存在について深く考えさせられました。何か自分たちにも何か才能が隠されていて、それらをもっと伸ばし、磨かなければならない……というような気持ちにさせられました。

そして私たちは、自分の存在が神の前に本当に価値あるものなのだ……と話し合ったのです。あの集会は、人々に霊的な思いを抱かせ、人生の真の目的に気づかせるような、そしてクリスマスにはだれかに愛を示そうと決心させるような、そんなみたまのあふれる集会でした。」



# ♪ 福音の香り高らかに ♪

群馬LDS聖歌隊  
クリスマスコンサート



▲小曾根さんへの花束贈呈

◀桐生市産業文化会館での第6回クリスマスコンサート

去る12月22日(火)午後7時より第6回群馬LDS聖歌隊クリスマス・コンサートが群馬県桐生市産業文化会館大ホールで開かれた。

桐生市社会福祉協議会および太田市社会福祉協議会の後援を受けて開催された今回のコンサ

ートでは、1981年が国際障害者年であったこともあり、一般の聴衆に加えて特に近郊の障害をもつ200名の方々が招待され、共に楽しいひとときを過ごした。

また、車椅子の詩人として有名な小曾根俊子

さんをゲストとして迎え、彼女の作詞、妹の敦子さんの作曲による「愛になれますか」が群馬LDS聖歌隊の前指揮者であったタイス俊子姉妹の独唱により一般に披露された。この曲は、去る11月29日に館林市で開かれた「わたぼうしコンサート」の入選曲である。彼女のひたむきに生きる姿を浮き彫りにするかのような美しい詩と愛は、会場につめかけた多くの人々の心を打った。

6回目を数える今回のコンサート活動も、隊員一人一人が、福音の種をまく喜びを得、それぞれが努力を積み重ねて作り上げた結晶を、証として多くの人々と分かち合える素晴らしい機会となった。

優れた才能を持つ兄弟姉妹による群馬LDS聖歌隊のなお一層の活躍が期待される。(指揮者：古原さよ子姉妹、伴奏者：福本美幸姉妹、ソリスト：青木柚美子姉妹)

---

## 風刺のいききた粹な舞台演出

### 「グッバイ・サンタクロース」



- ▲渋谷東邦生命ホールで熱演する教会員
- ◀フィナーレ

去る12月26日、渋谷東邦生命ホールで行なわれた「グッバイ・サンタクロース」という劇が話題を呼んだ。

これは、教会員によって構成されていた元劇団枯草の有志たちが中心となり、地城社会の人人への伝道を目的として試みられた画期的な劇と言える。前半では都会での信仰の持ち方が問題となり、後半は楽しい雰囲気の中にクリスマス・キャロルで終わる、一サンタクロースを主人公にした物語である。クリスマスの本当の意

味を忘れ、単なるお祭り騒ぎとして終始することへの批判が込められたベーススあふれる内容。

しかし、深刻な劇ではなく、様々な登場人物が折りなすコミカルな動きは、会場を笑いの渦とした。フィナーレに組み込まれている、舞台の大きな贈り物の箱からサンタクロースや妖精たちが飛び出し、実際のプレゼントを観客に贈るシーンは感動的であり、和気あいあいのうちに劇は終わった。凝った舞台装置、衣装、メーカーキャップは、その道に通じた専門家の助けもあり



見事な出来栄えと言うほかはない。

ある出演者の両親は、この演劇を見て、「教会の方々は本当に素晴らしいですね！今まで教会について誤解していました。これからも息子をよろしくお願いします」と涙を流していた。

## 演劇活動を通して もたらされるもの

「グッバイ・サンタクロース」を  
演出して

私たちはそれぞれ才能というタラントを持って生まれてきます。神様は私たちにそのタラントを増し加え、世の人々のために用いるよう教えておられます。また、そのように自己の才能を生かす時に、人は喜びを得ます。

水に放たれた魚のように生き生きと神様の王国で自分の務めを果たせるようにとの願いと、地域社会に働きかけることのできる伝道活動という目標を持って、私たちは演劇活動を始めました。演劇を公演するまでには多くのチャレンジを乗り越えなければなりません。しかし努力



▲好評を博した「グッバイ・サンタクロース」

と誠意は必ず暖かい拍手で迎えられます。

演劇活動を通じて私たちは多くの収穫を得ました。非教会員の友人、家族、会社関係の人々への招待。演劇を通じての改宗。不活発会員の再活発化。そして、兄弟姉妹の絆を強め、参加する各人が目標に向かって邁進することにより証を強め、成長できたことなどです。

神様への思いを私たちは演劇や音楽を通して地域社会の人々に証できると信じています。

(津田政廣・東京南ステークス部第一副ステークス部長)

### ★私の証

## 情緒障害児と共に

安田 琢三

(旭川西ワード部・高校教諭)

私の長男基は、生まれながらの情緒障害児である。18歳の今日になっても、言葉ひとつ満足に話せず、身の回りのことも自分ひとりではできない。彼が幼児自閉症であることがわかったのは、2歳の末頃だった。その時は正直、目の

前が真っ暗になる思いだった。それから今日まで、数多くの苦難があった。彼には絶えず介護が必要で、その多くは妻がしたが、並大抵のことではなかった。毎日の学校の送り迎えもそのひとつだったが、大きくなるにしたがって、連

れていくのも難しいことがあった。体が大きくなって引っ張り歩くのも容易ではないし、途中で何度も立ち止まり、歩くことを拒否するからである。学校にいる時間も精々2、3時間で、一日の大半は家で過ごした。家の中でもじっとしていることは少なく、始終何かちよつとしたいたずらをするので目が離せない。

彼は今施設に入っていて、夏冬の休みには帰宅するが、その苦勞は前に比べれば物の数ではない。今振り返ってみると、この大変な仕事を妻はよく成し遂げたと、身近にいながらも感嘆する。彼女はどんな状態にあっても、常に明るく活動的で、家庭はもちろん教会の責任もきちんと果たした。私が支部長や高等評議員、そして今監督の責任に、安心して働いてこられたのも彼女のバックアップのお陰である。

私は最初に、この長男基についてのことを苦難と書いたが、これは実は正確な表現ではない。私たち夫婦は、長男が障害児ではあったが、その後の出産に恐れを抱きはしなかった。今私たちには、長男を加えて4男2女の6人の子供がいるが、障害児は彼ひとりである。それに私たちは、基を人前から隠さないで、むしろよく見てもらうようにさせた。確かに異常な行動をして人目を引くが、彼も神の子であり、恥ずべきことではないと思ったからである。

私が一番嬉しかったのは、弟や妹たちが長男に愛情を示し、ひいては障害者に理解を示してくれたことだった。次男が中学校の演説会で話すのをたまたま傍聴したが、彼は兄の病気のことを率直に話し、ついで障害者に対する理解を訴えた。私は聞いていて、胸が熱くなるのを禁じえなかった。

私たちにとって、長男基は実に神様から与えられた恵みだと思ふ。子供たちは基を通して、障害者に対する思いやり、ひいては隣人に対する愛を身をもって学んだと思ふ。私も妻も自閉症児の父母の会の役員など、障害者の運動を手伝うことができたのも祝福だと思っている。



安田琢三兄弟と御家族

現在父母を加えて家族10人が平穩に暮らしているが、これまで私たち夫婦や家族には、少なからぬ試練があった。父の事業の失敗と倒産。それに伴う私の転職や失業。そして障害児の誕生と、決して平坦な道ではなかったが、何とかこれを乗り越えてきた。これらの体験から、今ではどんなことが起こっても私たちはそれに耐えていけるという自信がある。

そして、これら多くの困難の中でも、主の戒めをしっかりと守ることができたことを感謝している。神様はこのような困難の中でも、奉仕するに十分な時間とお金と能力を与えて下さった。そして絶えず励ましと勇気をも与えて下さった。私はもともと体も弱く、性格もおとなしく神経質な方だったが、今では自分ながら特に精神的にたくましくなったと思う。常に平安に満ち自信にあふれた気持ちである。これも多くの試練に耐え、神様からの祝福を蓄えることができたからだ、感謝の気持ちで一杯である。(やすだ・たくぞう 1931年生まれ、現在旭川西ワード部の監督の職にある)

▶おわび訂正 ◀2月号p.2の左下から2行目の「機会を」は「機会も」の誤りです。おわびして訂正いたします。



## シオンの確立 を目指して

### 4人の地区代表の 82年度目標



柏倉仁長老

〔札幌・札幌西・  
仙台・高崎ステ  
ーキ部担当〕

1. 福音への思想の一致（みたまの導きによる信仰の一致）2. 伝道活動の強化（伝道部とステーキ部の一致による前進）3. 聖餐会の霊性アップ（話の準備、アッシャー、コーラス等の充実）4. フェローシップの強化（優しく、親切に思いやりをもって福音へ導く）5. 役員のリダーシップの強化（特に監督／支部長の指導力強化）



田中健治長老

〔東京北・東京・  
東京東・東京南・  
町田・横浜・静岡  
ステーキ部担当〕

1. 聖霊とキリストの聖きみたまの導きをいつも受けられる清い生活をする。2. 責任を果たすために必要な健康と時間と費用をい

つも用意するために頑張る。3. 指導者に心から従うために、同じ思いと希望と直感が得られるように学ぶ。4. 皆様の素晴らしい望みが達成されるようにお役に立つ。5. 続けて温かく、強く成長する家庭を維持し、その数を増す。



安芸宏長老

〔名古屋西・名古屋・大阪・大阪北・神戸ステーキ部担当〕

モーサヤ4：12の聖句のようになるために以下の事柄に留意する。1. 立派な夫、父親であるように努力する。2. キンボール大管長や菊地長老からのメッセージと勧告を繰り返し学ぶ。3. ステーキ部長が掲げた年間目標を常に銘記して、その実現、達成を図るために正しい神権個人面接を行なう。4. 教会に偽りが入り込まないように祈りと断食を行ない、熱心に聖典を学び、主の器となつて働けるよう細心の注意を払う。5. 結婚のために尽力する。



鈴木正三長老

〔広島・高松・福岡・沖縄ステーキ部担当〕

1. 監督の訓練をし、青少年の育成を図る。2. 伝道活動の強化により、全会員の成長を図る。3. セミナリー・インスティテュートへ参加を通して、霊的成長と神の家の土台を築く。

来日聖徒はキリスト教会

浦和キリスト教

付属図書館



そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。（ルカ21：27）